動物の王妃

あきチャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
動物の王妃

【Ｎコード】
Ｎ３７０４Ｎ

【作者名】
あきチャン

【あらすじ】
ムーンライトの方で執筆させていただいた話のエロカットバージョンです。獣人を束ねる王様ルーと、その兄ロウとの切ない三角関係の話です。
本編の試し読みとして思って読んで頂けたら幸いです。

喪失（前書き）

ムーンライトノベルズに投稿させてもらった作品を、エロを抑えた感じでまとめました。本編は第二章に入ってます。
１８歳以上の方、そちらも読んでいただけた幸いです。

喪失

気持ちの良い天気…
私は空を見上げながら学校へ登校していた。

私は都内の高校に通う普通の女子高生。
鈴木一年（すずきはじめ）は１７歳。
特技は昼寝、のび太くん並みに寝付きもいい。見た目も普通。
勉強もスポーツも苦手。オシャレも好きじゃない。化粧もしないし、
香水も付けない。

高校進学と共に都内に引っ越してきた私は、自然があまり無いこの
町に馴染めずにいた。
無機質な街並みを登校する毎日はつまらない。
だから私は空を見上げながら毎日登校する。

「にゃう…」
突然足元から妙な声が聞こえた。
私は自分の足元を見る。
そこには真っ白な毛並みの高級そうな猫が居て、私を見上げていた。
「うわぁ…綺麗な猫…」
私はしゃがみ込み、その猫に触ろうと手を伸ばす。
でも猫はスルリと逃げ、行ってしまった。
「あーぁ、残念…。」
私は立ち上がり学校へ向かおうとすると、また声が聞こえる。
「にゃう…」
猫は私の方を見て鳴いている。かと思ったらまた歩き出す。
鳴いては歩き、鳴いては立ち止まり…
着いてこいっと言わんばかりの態度に私は素直に従った。

綺麗な猫は近くの神社に入って行った。
「こんな所に神社なんて有ったんだ…」
私が境内に足を踏み入れると、猫の姿は見えなくなった。
「見失っちゃった…」
私は暫く猫の姿を探したが見当たらない…境内を見渡す。
自然が溢れる境内は私が以前住んでいた町を思わせる。
懐かしくなり、私は境内に設置してあるベンチに腰を降ろした。
私は目を閉じ周りの空気を吸い込んでいた。
澄んだ空気に、木々の香り…ここが一気に気に入った。
私は学校の事なんて忘れて寛いでいると、隣にあの綺麗な猫が座っていた。
「ありがとう、君のお陰でこんな素敵な場所に出会えたよ…」
「にゃう…」
猫は返事をして、私の太ももに顔を置く。
「君って本当に綺麗な猫だね…」
猫の毛は木漏れ日に当たり、金色に光っている。
金色の毛を優しく撫でながら、私は少しの間ボーっとしていた。

「あっ寝ちゃった…」
私は自分の垂らしたヨダレが冷たくて目を覚ます。
気持ちいい場所だなぁ、また来よう。
私が目を開けると、目の前にはさっきと違う景色が飛び込んできた。
「あれ？私は神社に居た様な…」
真っ白な室内。部屋の造りはテレビで見る宮殿を思わせる。
窓は無い。その代わりドアも無く、支えているのは真っ白な柱。
床には毛の長い絨毯。その真っ白いフカフカの絨毯の上に私は寝ていたらしい。
天蓋が付いていて、ベットというよりは寝床って感じ。
「夢遊病かしら…私。」

私が不思議そうにキョロキョロ室内を眺めていると、カチャカチャ音が聞こえてきた。
私は慌てて身なりを整え、正座をする。
現れたのは男の人の様だけど、顔を見ずに土下座をした。
「すっすみません！！私…」
私が頭を下げていると、上から声が聞こえてきた。
「顔を上げろ。」
若く低い声。私はその声に従い顔を上げ、声の主の顔を見る。

声の主は若い男だった。
髪は腰まで長く、白髪っというか金髪といか…細く綺麗な髪。
背も高い。白い色の布を体に巻き、腰の所を金の紐で縛っている。
長い髪の間から覗く顔は、今まで見た事も無い位整っていた。
「……」
私はその男を口を開けて眺めていた。
「…何だ？」
男は少しムスッっとしながら喋った。
良く聞いたら声まで綺麗な…なんだか羨ましい。
「いっいえ、すみません。貴方があまりに綺麗で…」
私は突然掛けられた言葉に、正直な返事を返してしまった。
男の人に綺麗なんて…私の馬鹿！！
でも男の人は満足そうに笑うと、私に銀のコップを差し出した。
「飲め。」
私はコップを受け取り、中を覗く。
何やら液体が入っているが、ピンク色の液体は水では無い様だ。
見知らぬ方からこんな…飲めと言われても何だか分からない液体だし…
私が考え込んでいると、
「飲め！」
怒鳴る声が聞こえ、私は何だか分からない液体を一気に流し込んだ。

「美味しーい！！」
思わず叫ぶほど美味しい液体は、甘く…そしてフルーティー。
「これ、何ですか？」
私が男に聞くと、男は笑いながら言った。
「お前の運命を決めた酒だ。」
うっ運命ですか？そんなカクテルあったっけ…。
私が意味も分からず首を捻っていると、男はおもむろに私の前に座り込み顔を覗き込む。
「そろそろだ…。」
「そっそろそろですか？何…が…」
急に目の前が暗くなり、私は意識が無くなった。

「！！！！」
ザワザワする声に私は目を覚ました。
ココは一体何処でしょう？
さっきとは違う部屋。広い場所に小上がりの舞台みたいなのがあって…
私はその舞台みたいな所にポツンと置かれた椅子の上に座らされていた。
下には沢山の人が居た。ペットを連れている人も。
何が何だか分からない私は、取り合えず逃げようと立ち上がる。
その時、いきなり辺りが静まり返った。
ツカツカとさっきの男が入ってくる。
「皆の者、よく集まった。」
男が一言声を掛けると、皆男に頭を下げる。
「良く見るがいい…」
男は私の前に来て、さっきのコップを差し出す。
これって、急に意識が無くなった原因では？
「飲め。」

男は私の手にコップを握らせる。
「あっあの…これはチョット…」
眠らされて海外に売り飛ばされても！！
私は思いっきり躊躇った。
「良いから飲め！」
男は怒鳴るが、私も身の危険を感じ飲めなかった。
部屋中にざわつく声…何やら変な空気。
「お前…殺されたいのか？」
ひぃ！そんな綺麗な口から、なんと恐ろしい事を！！
私は死より売り飛ばされる方がマシだと思い、一気に飲み干した。
飲み終わると周りから一気に歓声が聞こえた。
「おめでとうございます！」
「おめでとうございます！」
何がおめでたいんだか…
私が考えていると、男が皆に向かって話し出した。
「今日からこの女は私の妃だ。皆丁重にな。」
拍手と喝采の中、訳も分からず部屋から連れ出される。

私と男はさっきの真っ白な部屋に戻ってきた。
「あのぁ…これは一体どういう事ですか？」
さっきとは違い眠くならない液体、妃がどうのって…
「そういう事だ。お前は今日からこの国の妃だ。」
？？？はい？
「はぁーー？」
私は怒鳴る様に声を出す。
不機嫌な顔の男は喋りだした。
「下品な女だ…これが俺の妃だとは…失敗したか…」
ふぅっとため息を吐かれた。
「意味が分かる様に説明して下さい！」
私は怒りながら説明を求めた。

「何でさっき眠くなったんですか？あの人達は？ここは一体何処？」
一気に捲し立てる。
「騒ぐな女。分かったから。」
嫌そうな顔をして、男は説明しだした。
「ココは俺の国。どこって言われても俺の国。さっき飲んだのは運命の酒だ。」
「運命の酒？」
「あぁ、あれは王妃を決める時に使う。運命の女以外が飲むと、苦しみながら死ぬ酒。
意識が無くなったのは強い睡眠薬が入ってるから。」
平然と話す。苦しみ死ぬ酒？そんな恐ろしい物を飲んでたなんて…
「そっそんな恐ろしい物飲ませるなんて…」
「まぁ、お前は大丈夫だったんだから…」
平然と話す男に怒る気も失せる。
「あれって、毒なんですか？何が入ってるんですか？」
おそるおそる聞く。後遺症でも出たらどうしよう…
「まぁ、毒と言えば毒だ。俺の体液入り。飲みやすくフルーツも入れた。」
「たったったっ…体液？？」
「あぁ、平たく言えば精子。」
うっうぇーっ精子…知らない男の精子飲んじゃったの？最悪だ…
「俺たち王家の一族の体は、下々には受け入れられない程の魔力を帯びている。
その魔力の詰まった精子に耐えられる女で無くては、王家の子供を産む事が出来ない。
魔力に飲まれて皆発狂し、死んでしまう。」
「へぇーそんなんですか…大変ですね…」
私は素直に大変なんだなぁっと思った。
ってか…冷静になれ私。この人へんな事ばっかり言ってる！魔力？王家？

この科学の時代にそんな馬鹿な事あるわけ無い！！
「でっでは…私はこの辺で…」
早く家に帰らなくちゃ！！
私は本当に身の危険を感じ、その場から立ち去ろうとした。
「無理だ。」
男は呟くと手のひらを私の方に向け、何やらブツブツ呪文らしき言葉を唱える。
「！！」
私は急に体が硬直する。
手を動かそうとしても動かない！
男が私の前に立つ。
「おっお願い…殺さないで…」
私は怖く涙が出る。震えた声で男に懇願する。
「馬鹿な。殺しはせん。漸く見つけた妃なのに…」
男は私の頬に両手を当て、優しくキスをする。
うわー！私…ファーストキスだったのに…
男は私の口を啄み、舌を入れてきた。
私の口の中で動く舌…初めての感覚…頬が熱くなる。
「口を開け…」
私は素直に従う。体動かない筈なのに…男の命令に対しては動く。
本当に魔法が実在するなんて…
「舌を出せ…」
私は自分の舌を突き出す。
男は私の舌を美味しそうに吸う。はっ恥ずかしすぎる！！！
「くっくぅ…」
息が苦しい…キスなんてした事ないから、呼吸のタイミングも分からない。
「我慢しなくていい。感覚に素直になれ。」
男の言葉に恥じらいの意識が和らぐ。
男はまた私の口を吸い始めた。

私も男の言葉の所為にして、男の舌を吸った。
なんだか自分の股間が熱くなっていくのが分かる。
モジモジして…
男は私の様子に気付くと、また命令をする。
「後ろを向け。」
私はヨロヨロと男に背を向ける。
「そのまま四つん這いになれ。」
私は言われたとおりに膝をつき、男に尻を向ける。
「そのまま…」
男はおもむろに私のスカートを捲り、下着に手を掛ける。
いっ嫌！！止めて！！
叫びたくても声が出ない。
下着は一気に脱がされ、糸を引きながら膝まで落ちる。
スースーする股間…みっ見ないで！！
「良い匂いがするな…」
男はそう言うと、私の大事な所を…
お腹が圧迫される感じと…激しい痛み…後ろから聞こえる喘ぎ声…
首筋に痛みが走り…私は気を失う。

ルー

翌朝、私は目を覚ました。
慌てて状況を確認しようと辺りを見回す…が、何だか様子が…
「あれ…もしかして…夢？」
私は自分の部屋で寝ていた。見慣れた部屋の風景…
「やっ嫌だ！私…すっごいヤラシイ夢見ちゃった…」
軽く自分の頭を叩き、ベットから身を起こす。
立ち上がろうと足を下に垂らし、力を込める…っと、下腹部に痛みが走った…
「っ痛ぅー！！なっ何これ…」
膣が痛い、それに腰もダルい…生理痛？でも何時もと違う様な…
私はヨロヨロ立ち上がり鏡を見る。
「うっわー、乙女の顔じゃない。最悪。」
鏡の中の私は顔色も悪く、疲れた顔をしている。
「変な夢見て疲れたのかな…」
頬を弄りながらマジマジ鏡に食い入る…っと、ある事に気付く。
「えっなっ何これ…」
そっと首に触る。チクッっと鈍い痛みが走る。
「何かに刺された？でもこれって…」
首筋に二つの小さな傷…吸血鬼の噛み跡みたい。
「うーん…何だろうこれ…」
私はチラリと時計を見る…うわっ学校に遅刻しそう！
急いで制服に着替え、とりあえず鏡の前に立つ。
クルンッと一回転して乱れをチェックする。
「うんっ平凡でよろしい！…ん？何だろう…」
自分の制服にキラリと反射する物が付いている。
私はその反射する細長い毛の様な物をつまみ上げる。
「何だろう…これって…猫の毛？」

細く真っ白な毛…夢で見た猫の毛に良く似ていた…
「昨日猫なんて触ったっけ…って時間！！」
私は遅刻寸前なのを思い出し、急いで家を飛び出した。

何時もの無機質な街を歩く。
車の音が五月蠅い…空気が臭い…
あー、夢で見た神社…本当にあればいいのに…
私が考え事をしながら歩いていると、目の前を一匹の猫が通り過ぎる。
「あっ猫…」
黒い猫…夢の猫とは違って、全身真っ黒な猫…でも毛が艶々輝いて綺麗…
猫は、私の前を通り過ぎる瞬間、一瞬頭を下げる。
「えっうそ…」
確かに頭を下げた様に見えた。
「まっまさかね！偶然！偶然！」
私は歩き出す。

学校付近の大きな家…私は何時も緊張しながら通る。
何でかと言うと、物凄く大きな犬が飼われているから。
多分狩猟犬とか警察犬とかで見かけそうな鋭い顔…
鎖に繋がれているけど、必ず吠えてくる。門の隙間に鼻を突っ込み吠えるから、
前を通る人達は必ずビックリする。分かっていても怖い…
私は道路の反対側を歩き、なるべく近寄らない様に通り過ぎる。
「おっ今日は吠えない…ラッキー！」
私はチラリと横目で犬を見る…えっ嘘…また？
犬は私に向かって頭を下げている…嘘みたい…
「そんな…こんな事ってあるの？二回も偶然が起こるなんて…」
私は周りを慎重に見渡す。良く見ると至る所で動物たちが私に会釈

をしている。
「きっ気持ち悪…」
私は急に怖くなり、学校に逃げ込んだ…

その日の授業は全然頭に入らなかった。
気味の悪い光景…まるで人間の様な仕草…見間違いにしては多すぎる。
授業が終わっても学校から出るのが怖い。

「おい！様が無いなら早く帰れ！」
担任の先生から怒られ学校を出る。
帰り道でもお辞儀されたら怖い…
私は余所見せず全力で走って帰る…

いくら走っていても、信号だけは止まらない訳には…
私は早る気持ちで変わるのを待つ…
早く…早く…早く…
もう少しで変わろうとした時、私の足元に異変が起きる。
「ニャーニャー。」
「にゃう。」
「ニーニー。」
数匹の猫に囲まれた。
特に噛みつく訳でも、すり寄る訳でもなく、ただ足元で鳴くだけ。
「えっ何？」
訳も分からず震える。
「ニャー。」
「ニャッニャッ。」
「ニャウニャウ。」
猫は鳴き続ける…絶対に変な光景。怖い…
「お願い…怖いからあっちに行って…」

私は手をヒラヒラさせて追い払う動作をする。
すると猫たちは頭を下げてから何処かに行ってしまった…
「言葉が…分かる？」
私はなるべく人通りが多い道を選び家まで帰った…

「一！ご飯よー！」
一階から母の呼ぶ声が聞こえ、私は自分の部屋から出る。
「お腹すいたー！オカズ何ー？って…なんで…」
私がダイニングテーブルの私の何時も座る席…そこには一匹の猫が座っている。
「おっお母さん…なんで…」
私は震える指で猫を指す。
「何って…ルーじゃない…変な子ね。」
「ルッ…ルーって？この猫の名前？」
「本当に変な子ね。早く座りなさい。」
「座れって…私の席に猫が座ってるじゃない。早く退かしてよ！」
「何言ってるの？その席はルー専用じゃない。」
「おっお母さんこそ何言ってるの？」
私は父と母の顔を交互に眺める。冗談を言っている顔ではない…
「何がどうなってるの…」
「食べるの？食べないの？」
母が少しイラッっとしながら話す。
「たっ食べるわよ…」
私は状況が理解できなかったが、取り合えず空いている席に座る。
「もう、本当に変な子！早く食べちゃいなさい。」
私の前に食事が並べられる…今日は魚料理ばかり…
「頂きます。」
取り合えず食べ始める…何時もより味が薄いな…
ふと目の前の席に目を向ける…ねっ猫も一緒に食事をしている…
人間様が使うより高級そうな銀の皿の上に並べられた食事…なっ生

意気！
「お母さん？なんで猫が一緒に食事してるの？」
私は少し声を荒げ母に聞く。
「今日は本当にどうしたの？何時もそうじゃない…」
「いっ何時もって…」
呆気にとられていると、猫は、
「ニャッ。」
っと短く鳴き食事を続ける。
その猫は真っ白で…夢で見た猫によく似ていた…
蛍光灯の下でも輝く毛…若く美しい猫…
食事も綺麗に食べる…口元なんて汚さない…

猫は食事を終え、顔を洗っている。
軽く自分の手を舐め、スタンッと華麗に椅子から降りる。
そのままリビングを出て何処かに行ってしまった。
私はその流れるような動作に見惚れ…目が離せなかった。
「食べないなら片づけて！」
母の声に急いで食事を口に詰め込む。

私は自分の部屋に戻るとすぐさま布団に飛び込んだ。
何か変…外も内の中も…
おかしいのは自分の方かもっと思うくらい全部がおかしい。
とっ取り合えず寝てしまえ！私は寝る準備をしようとクローゼットへ向かう。

「ニャウ！」
急に猫の声が聞こえ振り向く。
さっきの白い猫がベットの上に座っている。
なんか睨んでいる様にも見える。
「なっ何よ…」

私は身を竦めながら猫に喋りかける。
「ニャウニャウ…ニャ…ふぅ。」
猫は鳴いた後ため息を吐く…ねっ猫がため息？
猫はウーンと伸びた後、不思議な変化を遂げる。
体をバキバキ鳴らしたかと思ったら、見る見る身長が伸び始めた…
「いっ嘘…」
私は怖い気持ちもあったが、何故か猫から目が離せなくなった。
身長はある程度の長さで止まり、今度は骨格が変わり始めた。
抜ける毛と伸びる毛…手足が伸びツルツルの白い肌に変わる。
瞬く間に、美しい若い男の姿になった…
腰まである美しい髪、引き締まった体…整った顔。
この男…夢に出てきた…私に恥ずかしい事をした…ってかこいつ、
真っ裸！！
てか、ゆっ夢じゃなかったの？
私は目の前の光景が受け入れられず、失神してしまう。

「おいっ起きろ…」
頬を叩く痛みで意識が戻る。
「いっ痛い！」
私はムカッっとして飛び起きる。
「おいっ大丈夫か？」
心配そうに覗きこむ美しい顔…あっこの人！！
私はさっきの出来事を思い出し、
「ぎゃーーー！」
っと思いっきり叫ぶ。
男は一瞬脳震盪を起こしたようにクラッと来ていた様だか、すぐに
元に戻り、
「五月蠅い。」
っと一言。
「うっ五月蠅いって、あんた誰？ってか昨日私に何かした？それに

何で裸？」
っと言い返した後、私の叫び声を聞いた家族が駆け上がってきた。
「おい！一！大丈夫か！」
「一？一？」
焦る父と母の声…階段を駆け上がる音…
バタンッと私の部屋の扉が開く…
やばい！この男の事、なんて説明しよう…
「あっ！！」
両親は目を丸くして立ち止まる。口をアガアガ震わせて…
「あっあの…これは…」
私が良い訳しようとオドオドしていると、男は華麗に立ち上がり両親の目の前に…
「……王の寝室に無断で入るな…」
こっこいつ頭も狂ってる！！お父さんと取っ組み合い？？マズイ！
慌てて割って入ろうとするが…両親の様子が変だった。
「……はい…申し訳ありません…」
うつろ気に謝罪する両親…どうなってるの？
「…下がれ…呼ぶまで控えろ…」
男は低い声で命令する。
「かしこまりました…」
素直に従う両親…頭を下げたまま部屋を出て行った。

王の威厳（前書き）

ちょこっとですが、表現が露骨な部分あります。
苦手な方は、そこだけササッと読んで下さい。

王の威厳

「どっどういう事？」
私は男に詰め寄る。
「何が…」
男は冷たく一言。
「何がって全部！！昨日と今日と…意味分かんない！！」
息を切らせて怒鳴る。
「五月蠅い女だ…大声は癪に障る…静かに話せ…」
癪に障るのはこっちだ！！っと言ってやりたかったが、取り合えず
静かに話してみた。
「貴方は誰？」
「王様。」
「はっ？」
こいつ一体何さま？あぁ…王様って！この日本には王様は居ません！
「王様って何処の国の？」
「動物の国」
「お山の大将？」
「はっ意味が解らん。動物を束ねる国だ。」
そっそんな…意味わかめ。
「そんな国あるの？」
「国って言っても連合のような物だ。地球全体の。」
「はぁ…そうですか。」
これ以上聞いても無駄だと思い、話を変える。
「名前は？」
「ルーシャ…ルーシャ・カイン」
「がっ外人さんですか…」
日本人にしては掘りの深い顔。言われてみれば…瞳の色はブルーだし。

「いや、日本生まれの日本育ちだ。」
「あっ左様で…」

「んで本題ですが…貴方、昨日私に何かしましたか？」
核心の質問。
「あっ何って…交尾しかしていない。」
「こっこっ交尾！！！」
せめてＨとかＳＥＸとか…交尾って獣ですか。
「やっぱり…ばっちり最後まで？」
恐る恐る聞く。
「当たり前だ。キチンとお前の中に射精しておいた。感謝しろ。」
そっそんな…初めてのエッチが変態猫なんて…
私が頭を抱え唸っていると、男が喋りだした。
「おいっ出掛ける。支度しろ。」
っと箱を私の足元に投げた。
箱の中には真っ白なドレスが入っていた。
「着替えろ。時間が無い。」
「きっ着替えるって…ココで？」
「早くしろ。」
「じゃあ出て行って。」
私はドアを指差す。
「？何故。今更何を恥じらう。」
「だって…」
男はため息を吐き私の目の前に立つ。そして私の目をジッと見つめる。
「なっ何よ。」
男と目が合う。きっ綺麗ね瞳…じゃなくて！
でも男の目から視線を逸らせない…
「着替えろ。」
「…はい。」

自分で体が動かせない…急に何で…
私は下着姿になり、男の目の前で着替えを始めた。
真っ白いドレスに身を包む。美しいドレス…
「うん、なかなか…よい。」
えっ似合いますか？恥ずかしい…
男は指をパチンッと鳴らす。途端に体が動くようになった。
「はぁはぁ…」
一気に疲れが押し寄せる。
「今の…何？」
昨日の夢でも似たような事があった様な…
「縛り。」
「えっ縛り？でもロープとか何もなかった様な…」
「意思での縛りだ。お前らでは使えん。」
魔法みたいな物？普通なら信じないけど…
でも今の私は簡単に信じた。
「とにかく早く支度を済ませろ。あっ匂いのする化粧はするなよ？」
「はっはぁ…」
私は身支度を整える。

「うん、よいな。」
ルーは頷く。
「ほっ本当？」
「あぁ。臭くない。」
見た目を聞いたんですが…
私はいつの間にかタキシードに着替えているルーと家を出た。
家の前にはリムジンが停まっている。
「乗れ。」
「こっこの車に？」
リムジンなんて初めて見た。なっ長い！！

「早く乗れ。」
私はルーの言うとおり、素早く乗り込む。

リムジンの中は別世界。
こんな高級車、テレビでしか見た事無い。ってか普通庶民はこんなの乗った事無いでしょ。
「うっわ…凄い…」
私は興味深々でキョロキョロ。
「落ち着きのない女だ。」
ちっっと舌打ちをするルー。私はムカッときて、
「女女って、私の名前は一(はじめ)！鈴木一！！名前が有るんだから、キチンと呼んでよ！」
プイッっと余所を向く。
「あぁ…名前知らなかった。一か…男みたいな名前だ。」
気にしている事をサラっと言う。
「名前も知らない女誘拐したの？信じらんない…」
私は呆れてルーの顔を見る。
何が？っと言わんばかりの王様顔…なんでルーは私に付きまとうのかしら…
「ねぇ、ルー。ルーはなんで私を誘拐したの？ただ強姦したかっただけ？」
「強姦とは心外だな。私に抱かれるなんて名誉なんだ。
女は皆、私に抱かれたがるのに…変な奴だなお前は。」
「いや…無理やり動かなくされて姦られるのが好きな女なんて居ないから…」
「そうなのか？」
「それに、なんで私なの？」
美人で魔法を使わなくても足を開く女なんて沢山居るだろうに…それに、ルーの容姿なら、
それこそ我先に！って人沢山居る筈。

「殺してしまうから…」
「えっ？」
思いがけない言葉…
「こっ殺しちゃうって…どういう事？」
ルーは悲しげに説明しだした。
「昨日お前を見つけて感じたんだ。お前なら死なないだろうと。
昨日も言ったが、俺たち王族の精液は毒の様なものだ。並大抵の雌は発狂して死んでしまう。」
「あの昨日飲んだ酒の意味は？」
「突っ込んでる最中に狂っては気が萎える。姦る前に死なないか確かめる。」
「左様ですか…って、もしかしたら私も死んじゃってたかも知れないって事？信じらんない…」
私の顔面は青ざめる。
「でも死ななかった。まぁ、そんな気がしてたから。それに匂いが良かった。」
「昨日から匂い匂いって、私普通だと思うけど…」
クンクン自分の匂いを嗅いでみる。
「人間の鼻では分からん。獣人だけが分かるフェロモンの匂いだ。並みの動物でも無理だ。」
「へーって、獣人？」
「人間と獣を行き来出来る者の事だ。」
「ルーの他にも居るの？」
「あぁ。我々王族は猫だけだが、犬、熊、馬…色々居る。我々猫族が魔力では一番だがな。」
なんか嘘みたいな話…私も目の前でルーの変身を見なかったら信じないだろうし。
「私以外にルーの魔力に耐えた人は居たの？」
「いや…お前以外試した事がないからな。」
わっ私がルーの初めての女か…この綺麗な男の初めて…ちょっと嬉

しいかも。
でも、初めてであんなに激しい交わりって出来るもんなのかしら…
私だって初めてで、なのにあまり痛く無かったし…きっ気持ち良かったし…
私が顔を真っ赤にして悶絶していると、ルーが顔を近づけてクンクン臭いを嗅ぎだした。
「思い出しているのか？」
心を見透かされ、思いっきり否定する。
「ちっ違うよ！！そんなスケベな事…」
ルーはクスッと笑って、
「匂いで分かる。感じている匂いだ。まだ薄いがな…」
ルーは私の耳元で甘く囁き、私の耳の中に自分の舌を入れてきた。
「きゃっあっ…。」
ゾクっと駆け上がる快感。息が荒くなる。
ルーは私の耳を丁寧に舐める。
「気持ちよいのか？」
ルーは舐めながら囁く…くすぐったいけど…体が熱くなっちゃう…

「お前の匂いが濃くなってきた…俺も前が苦しい…」
ルーはすっかり興奮していた。
「ここ…触って…。」
ルーが涙目で言う。
ってか、危うく流されそうだったけど、私貴方と付き合ってる訳でもないのに…
昨日だってレイプみたいなモノだったし…
でも私、なんで今ルーと一緒なんだろう。あんな事されて。
自分でもビックリだけどルーに対する憎しみってあんまり無い。
むしろもう一度会えて嬉しいような…
そう自覚した途端、ルーが辛そうな声で懇願してきた。
「はっはじ…め…匂いが濃すぎて達しそうだ…」

にっ匂いでですか？車内だから充満してるのかな？
モジモジしている私。ルーは痺れを切らしたように、私の顔を押さえつける。
「んぐっ。」
私の口の中に自分の舌をねじ込む。激しいキス。
息が苦しい…息が出来ない。頭は真っ白。
ルーは口を離し、私を椅子に押し倒す。
「ちょっちょっと止めてよ！」
私はジタバタ…。でもルーは片手で私を押さえつける。強い力で…
また…流された…勢いでＳＥＸしちゃった…
私は自己嫌悪で、下を向きながら着替えを済ます。
ルーはペニスを抜くとサッサと後始末をし、自分の格好を整えている。
何かなぁー。
「ねぇ…ルー。」
「何だ？」
「ルーは何で私を…だっだっ抱くの？」
私は恥ずかしい質問をする。
「妃だから。」
何言ってんだと言わんばかりの顔。
「…きっ妃？」
そういえば昨日言ってた様な…
「私って…ルーのお嫁さんなの？」
「あぁ…そう言った。」
妃？私、プロポーズなんて聞いてないし…てかその前振りすら無いですけど。
「私とルーが夫婦？」
「何回も聞くな。」
呆気に取られている私を尻目に、リムジンは大きなホテルに着いた。

ホテルのエントランスに車が横着けされる。
ベルボーイの様な人がドアを開けてくれる。
「お待ちしていました。」
ボーイさんは私に手を差し出し、私は手を取って車を降りる。

ロビーを歩く。
私たちが歩くと、皆お辞儀をして通り過ぎるのを待つ。
ルーは堂々とその真ん中を通って行く。さも当たり前の様に。
「ねぇ…ルーって一体何者？」
私は聞かずには居られなかった。
「王様。」
まぁ…予想はしてたけど…

広い広間の様な所に通される。パーティー会場の様だ。
そこには沢山の人…あっあの人テレビに出てる！あの人は有名なスポーツ選手…
各界の著名人や、高級な装飾品を身にまとう人々…
ルーはそのど真ん中を進む。やっぱりルーが通り過ぎるまで皆頭を下げる。
私はルーの後をオズオズ着いていく。
身分の高そうな人ばかり…自分自身、場違いなのが分かる。帰りたい！！

ルーは一段高くなっている舞台に上がる。舞台には大きな椅子が二つ。
ルーは向かって左椅子にドカっと腰をおろし、足を組んで座る。
私はルーの後ろにチョコンっと立った。
「はじめ、何してる。」
ルーは前を向いたまま私に話しかける。

「えっ何って…」
私が戸惑っていると、ルーは組んでいた手を解き、隣の椅子を指差す。
「お前の席はココだ。ココに座れ。」
「えっこんな偉そうな席に？」
私が竦んでいると、ルーが当たり前のように話す。
「お前以外は座れない。ここは王妃の席だ。」
あっそうですか…一方的に王妃にされたんだっけ…
私は渋々席に着こうとする。
椅子の前まで来ると、執事風の若い男性が椅子を引いてくれた。
全身黒ずくめの男。真黒な髪…でも艶々してる。
背も高く、身なりも清潔感が漂う。綺麗な顔はルーに少し似てる。
私は軽く頭を下げ席に着く。男は私の着席を確認すると一歩下がって後ろに立つ。

「お集まりの皆さん。」
会場にマイクの音が響き渡る。喋っているのは初老の男性。
「本日はルーシャ・カイン様、一様の結婚の儀にお集まり頂き御苦労さまです。
　我らが王、ルーシャ様よりお言葉を頂戴いたします。」
男性はルーにマイクを渡す。会釈をして後方に下がる。
「皆の者…」
ルーが喋りだすと皆に緊張が走っているのが分かる。
「今日は御苦労であった。今日は我が妃、一を皆に紹介する。」
ルーは立ち上がり、私の目の前に立つ。
「立て。」
ルーが冷たく命令する。私は素直に従う。
「これが我らが妃、一だ。」
ルーに紹介され、私は頭を深く下げる。
「馬鹿！頭など下げるな！お前はここに居る者共の長になるんだ。」

ルーが私にだけ聞こえるような小声で叱る。
私は直ぐに顔を上げる。
皆私をジロジロ見ている。居心地が悪い。
「これからは皆、一を私と同等だと思い敬うように。」
ルーはマイクを男性に返す。
「では皆様、楽しい時間をお過ごしください。」
男性が締める。

ザワザワとパーティーが始まる。
ルーの前には行列が出来ていた。
順番にルーの前に出てきて跪き、ルーに挨拶する。女性は手の甲に口を近づける。
舞台から降りる人は皆恍惚の表情を浮かべている。
挨拶を終えた人から皿を取り、食べながら雑談している。
私はその光景をただ唖然として見ていた。

テレビや新聞でしか見れない様な有名人達が次々にルーに跪く光景…正直怖かった。
ルーって本当に王様なんだなぁ…半信半疑だったけど今日信じた。
だって総理大臣とかまで跪いてるんだもん！こりゃ本物だ。
皆の挨拶が終わったのは二時間後。はっきり言って疲れた。
姿勢を崩そうにもそんな空気じゃなくて。
私は舞台の上で二人きりになった瞬間、ふぅーっと深くため息を吐いた。
「疲れたか？」
ルーが私に話しかける。
「うん、少しね。」
私が苦笑いを浮かべると…
「これからが大変だ。」
ルーは恐ろしい事を言う。一体これから何が始まるの？

急に場内が静寂に包まれる。
会場の入口の人だかりが割れ、道が出来る。
真ん中から数人の人が入ってくる。
老若男女で、皆気品が漂う。明らかに普通の人間ではない。
その人達は私たちの目の前で立ち止まり、ルーの方を見ている。
一列に並び、順番にルーの前に上がってくる。
最初は老人。ルーに跪きルーの手の甲を自分の額に持っていく。
「おめでとうございます。」
老人は一言ルーに喋る。
「有難う。」
ルーが初めて挨拶を返す。
老人は立ち上がり、私の前に。
何が始まるのかしら…私の全身に緊張が走る。
老人は私に手を差し出す。どっどうしたら？私はルーに助けを求める。
でもルーは前を向いたまま知らんぷり。助けてよー！
私が戸惑っていると、後ろに立っていた黒髪の男が私に話しかける。
「王妃さまも膝をついて手を出して下さい。」
私はホッとして言われた通りにする。
老人は私の手を取り、甲に軽くキスをする。外国みたい！
「王妃様、そのままの格好で手だけ降ろして下さい。」
私は言われたとおりにジッとしてる。
老人は私の首筋に顔を近づけ…クンクンと匂いを嗅ぎ始めた。
ビックリしすぎて固まる私。
「ほぅ…これは…」
老人は感心して会釈する。なっ何が起こってるの？
私は固まったまま茫然とする。
「王妃様、立ち上がって下さい。」
黒髪の男がアドバイスを言う

私はぎこちなく立ち上がる。
私が立ち上がってから、老人も立ち上がる。
「王よ、また甘美な妃を見つけられましたな。」
老人は頬笑み舞台を降りる。
私はその後も同じ挨拶を繰り返す。
若い男は頬を赤らめ、若い女は顔を顰めながら降りる。
正直良い気持ちはしなかったけど、拒否できる空気じゃなくて…
一通り挨拶が済むと私は再び椅子に座った。
そしてパーティーが再開する。

「良かったな。」
ルーは姿勢を崩さず話しかける。
そういえばずっと体制崩してないな…凄い。
「なっ何が良かったの？」
「お前は認められた。」
「……何に？」
「さっきのは王族だ。王族たちはお前を殺さなかった。合格だ。」
こっ殺され…またしても！
「気に入られないと殺されてたの？」
「あぁ…」
ルーは平然と答える。
「まぁ…もう何も言わないよ…」
何を言っても無駄だし。
「俺には確信があったんだ。」
「確信？」
「お前の匂いを否定できる獣人は居ない。」
そっそんな理由？危なっかしい。
でもチョット照れる。だってその中にはルーも含まれるんでしょ？
その後は何事も無くパーティーは進んだ。

「王が退室なされます。」
会場に響き渡る声。場内が静まり二つに分かれる。
人だかりの中に道が出来て、皆深く頭を下げている。
ルーは立ち上がり舞台を降りる。
私もルーの後を付いて会場を後にする。

ロウ（前書き）

大人表現あります。

ロウ

私はリムジンに再び乗り込む。
フカフカの椅子に座り、深く息を吐いた…疲れた。
でもやっと家に帰れる！
「疲れたか？」
ルーは優しく聞く。さっきとは纏っている空気が違う。
さっきまでは王様前回のオーラを出しまくり、今は優しい空気を醸し出す。
「大丈夫！でも…」
「でも？何だ。」
「ルーは私が奥さんでも良いの？」
「何故…そう思う？」
「だって…さっき挨拶してた人達…明らかに綺麗だし…スタイルも良いし…」
私が愚痴愚痴喋ると、
「何だ？やきもちか？」
ルーがクスッと笑う。
「なっ別に！」
私はズバッと言い当てられた事が恥ずかしくて、横を向く。
確かに最初は最悪の出会い。いくら顔が良くても自分をレイプした男。
しかも何度も死にかけた！自覚は無いけど…
最低最悪な我儘な猫男！でも…私はすっかりルーを好きになっていた。
容姿だけじゃない。我儘な合間に見せる優しさ…好きになった。でも、ルーは？
ルーは私の事どう思ってるの？ただの死なないダッチワイフ？
でも結婚したって事は…少しは好意があるって思っていいのかな？

「ねぇ…ルー。」
「何だ？」
「ルーは私の何処が好き？」
思い切って質問。顔が赤くなる。
「……匂い。」
一言ですか…。
「あっあっ愛してる？」
「……ふっ。」
鼻で笑われた！！最悪。

リムジンは豪邸なエントランスで停まった。ここ…何処？お城？
ドアが開き、ルーが先に降りた。
「降りろ。」
ルーは上から命令する。普段から王様。
「でも…ここは？」
私は車の中から聞く。
「家。」
短い返事。
「誰の？」
「…俺達夫婦の。」
ふーん…って俺達？って私も含まれてる！！
いくらなんでも急すぎる！せめて荷物を！！
「早く降りろ！疲れてるんだ！」
ルーは苛立って命令する。
私は急いで車を降りる。

玄関には執事&メイドさん達が待っていた。
左右に分かれ頭を下げ続ける。
「お帰りなさいませ！」
皆が挨拶をする中、ルーは無視してスタスタ歩く。

私はその後をオズオズ追いかける。
階段の前には執事さんが二人。マイクで喋っていた人と黒髪の人。
「お帰りなさいませ。」
二人が頭を下げる。
「あぁ…」
ルーは短いながらも返事をする。この二人は特別なのかな？
私も会釈をして通り過ぎる。

ルーは大きな扉の前で立ち止まり、黒髪の人が扉を開ける。
中は広い食堂。２０人は軽く座れそうなテーブル。ルーは上座にドカっと座った。
「王妃さま…こちらにどうぞ。」
ルーの斜め前の席の椅子が引かれる。ここに座れって事？
私は素直に椅子に座る。
「ねぇ…ルー？」
「何だ。」
「せめて家に連絡させて？」
私は夕食後、家を出たまま連絡をしていない。
お父さん、お母さん…心配してるだろうな…
「何故だ。お前は既に俺の妃なのに…連絡が必要なのか？」
ルーが珍しくマトモに返事をした。
「だって…何も言わないで家出て来ちゃったし…心配してると思う。」
私は俯いてルーに言う。
「心配？あり得ない。ちゃんと言葉で縛っておいた。」
「……縛ったの？」
「あぁ…愚痴愚痴言われても面倒だ。」
「ルー…そんな…。」
私は涙が出てきた。
「何故泣く？」

ルーは目を丸くしている。理由が分からない？
「だって…結婚式もしてない。ってかプロポーズだって…
私の花嫁姿、お母さん楽しみにしてたんだよ？それなのに…いきなり結婚って…」
私は正直な気持ちを言う。
「人間は面倒だな…分かった。」
ルーはいきなり立ち上がり、私の前で膝を付く。
「はじめ…俺と結婚してくれ。」
ルーが私にいきなりのプロポーズ…なんてベタなセリフなのかしら。
ルーは眉を顰め、額に汗が浮かんでいる。もしかして…緊張してる？
さっきまで偉い人達の長だったルーが、一般庶民の私に跪く…凄いかも！
でも…緊張じゃなくて屈辱？
でも…良いか！私の為にプライドを折ったって事でしょ？
「あはっ！分かりました。こちらこそお願いします。」
私は笑って返事をした。
ルーの顔が笑顔に変わった…初めてみるルーの笑い顔。
なんか執事の皆さんも笑ったルーを見てビックリした表情をしている。
ルーってそんなに笑わないのかな…
ルーは直ぐに椅子に座っちゃった。もう少し余韻を味わいたかったのに。

暫くして食事が運ばれてきた。銀食器に盛られた凄く豪勢な食事。
気がつけば真夜中で、小腹も空いていたし…ちょっと嬉しい！
ルーは一口二口食べて口元をナプキンで拭く。もう食べないの？
ルーは立ち上がり食堂を出て行こうとする。
まっまだ何も食べてないのに！！本当、猫！！！
私はルーの後を慌てて追いかける。

ルーは一つの部屋の前で立ち止まる。黒髪の男が扉を開ける。
どうやら今度は浴室の様。
でも、スーパー温泉ですか？っと言わんばかりの広さ…圧倒される。
壺をもったビーナス像からお湯が流れてるし…丸い浴槽だし…絵本ですか？
ルーは浴槽の淵に立つ。後ろからメイドさん達がやって来てルーを裸にしていく。
「！！！！」
予想はしていたけど…実際見ると複雑。
ルーは裸になり浴槽に腰まで浸かる。湯気の中に白髪が光り、湯に白い花が咲く。
「お前も入れ。」
ルーは私に命令する。でも…恥ずかしいです。
「早くしろ！」
ルーが少し声を荒げ言う。慌ててメイドさんが私の服を剥ぎにやって来た。
「ちょっちょっ。」
私が慌てている間に…スッポンポンにされた。
胸と下を手で隠し肩を丸める。
「来い。」
ルーが手招きする。私は恥ずかしくて急いで湯船に浸かった。
だって…黒髪の人だって浴室に居るし…美人揃いのメイドさんだって居るし…
浴槽の中の方が見えなそうだと思った。

ヌルいお湯。３０度位？
私は少し寒かったけどルーは気持ちよさそう。
ってか猫も水に浸かるの？変なの。
「おい一…近くに来い。」
「えっ？」

「こっちに来い。」
ルーは命令を出す。
「だって…裸だし…」
口ごもる私。
「今更何を言ってる。」
まぁ、全部見られてるけど。でも女の子には恥じらいという物が…
ルーはチッと舌打ちをして…私の体に縛りを掛けた。また？
「こっちに来い。」
私はルーの言葉に逆らえずルーの側に行く。
ルーの言葉に逆らえず、私はルーの隣に座った。
「口を吸え。」
私はルーの唇を吸った…皆が見ている前で…死にたい位恥ずかしい。
ルーは口を開け…私はルーの口の中を舐め回した。
ルーの唾液は甘い…私はルーの口角から垂れる蜜を舐めた。
「うっ…」
ルーが顔を顰めた。
「いっ痛かった？」
私が心配して顔を覗くと…ルーは、
「もう匂いが濃い。」
…顔から火が出る。
「おい、ロウ。」
ルーは黒髪の男を呼んだ。この人…ロウって言うんだ。
「ロウもそう思わないか？はじめの匂い…良いだろう？」
ルーってば何て事を！！
「はっはい…」
ロウは顔を真っ赤にして俯いている。何やら中腰だし。
「ほうっやっぱりロウにも分かるか。血は争えないな。」
「恐れ入ります…くぅ…」
ロウも苦しそうだった。ってか今、血は争えないって言った？
「ねぇ、ルー？」

「何だ。」
ロウさんって親戚か何かなの？
私は何気なく聞いた。
「あぁ。ロウは俺の兄だ。」
「……えっお兄さん？」
ルーって兄弟居たんだ…じゃなくて！
「普通王位とかって産まれた順番に継承権があるもんなんじゃないの？」
私は何気なく口にした…でも直ぐ馬鹿な質問をした事に気付く。
その証拠にロウは気まずそうに微笑んでいる。
「……俺の方が魔力が上だったから…それだけだ。」
ルーはそう言うと湯船から上がった。

ルーはメイドさん達に体を洗われている…これは…結構ムカつく！
仮にも夫婦なら目の前で他の女性に体を触らせるなんて！王様って皆そうなの？
ルーは再び浴槽に浸かる。
「はじめ…来い。」
まださっきの縛りが効いているのか、私は素直に従った。
「触れ。」
ルーは自分の視線を自分の下半身に持って聞く。
あの…人が見てる前で触れと？出来るはず無いし。それにやり方も分かんない！！
でも従ってしまう私。穴があったら入りたい！！

それから…私はルーの言いなりで（まぁ…縛られてるからね。）
屈辱的な凌辱を受けた…

バタン！一人のメイドが倒れる。
どうやら私の匂いに失神したみたいだ。

他にも膝に手を付き耐えている人、壁に寄り掛かっている人…皆獣人なのかな。
って事はロウも？
私は快感の隙を見てロウに目を向ける。
ロウは遠くから見ても分かる位に前を膨らませ、思い切り口を噛んでいた。
口から血が流れている…
「余所見するとは…まだ余裕があるな。」
ルーはそう言って、私を激しく味わった。
「ロウ。」
ルーはロウを呼ぶ。腰を少し曲げたままロウが目の前に立つ。
「ほらっ。」
ルーは太腿に垂れている私の液を指で掬い、ロウの目の前に差し出す。
「しっ失礼致します。」
ロウは私の液を美味しそうに舐めた…なっなんて事を！！
王族って頭のネジが絶対外れてる！！信じられない変態っぷり！
私は恥ずかしいたら何やらで、今以上に太ももを蜜で濡らした。
ルーの肌がぶつかる音が浴槽に響いて…次々にメイドが倒れていく。
そして…
ルーは思いっきり私の中に果てる。私はその少し前に失神していた。

翌朝、私は物凄く豪華なベットで目が覚めた。
私はいつの間にか寝巻に着替えさせられていた。
辺りを見回してもルーの姿は無い。
ベットから降りようと足を下に着いた時、部屋のドアが開いた。
「お気付きになりましたか王妃。」
入ってきたのはロウだった。
「あっお早うございます。」
ロウに挨拶をした。

「ルーシャ様がお待ちです。お着替えが済みましたらご案内致します。」
ロウから真っ白な服を受け取る。
着替えようとした時、ロウがまだ部屋の中に居るのに気付いた。
私はロウの方を見た。
「あの…着替えたいんですけど。」
「はぁ、私の事はお気遣いなく。」
気遣いって…あっ！！思い出した！
私…ロウさんに全部見られてた！しかも…恥ずかしい液まで舐められて…
思い出しただけで顔が真っ赤に。
「王妃様…申し訳ありませんが…」
「はっはっはい？」
「暫く席を外しても宜しいでしょうか…」
ロウさんが苦しそうに喋る。
「あの…具合でも悪いんですか？なんだか苦しそうですけど…」
私は心配してロウの顔を見る。
「いえ…王妃様の香りが…自分を保てそうに…」
ロウのズボンはパンパンに膨れ上がっていた。
もしかして、私が昨日の事を思い出した所為？
「あっあの…すみません。一人でも大丈夫なので。」
私がそう言うとロウは頭を下げ部屋を出て行った。
私はロウが席を外している間に着替えを済ませた。
真っ白な服に着替え、私はロウに案内され真っ白な部屋に入っていく。
ここは…最初にルーと…えっエッチした部屋だ。
ルーは天蓋の下の寝床に横になり、私を待っていた。
横たわる姿は、一枚の絵画に様…光り輝く美しい髪、長い手足、美しい顔…涎出そう。
この人が私の夫なんだ…ちょっと自慢したくなっちゃうかも。

「おっお早う。」
言葉、噛んじゃった！
「あぁ。」
素っ気ない返事で返す。
「なっ何か用事？」
「あぁ。ココに座れ。」
私はルーの横にチョコンと座った。
「座ったよ？」
私は上からローの美しい顔を眺める。
「…撫でろ。」
「なっ朝から？」
私は顔を赤らめて抗議する。
「……何を考えておる。いやらしい女だ。」
！！！やらしいって、アンタにだけは言われたくない！
「髪だ。髪を撫でろ。」
あぁ、髪ね？はっ恥ずかしい勘違い。
私は絹の様なルーの美しい白髪を撫でる。
サラサラ…手で掬うと、途端に流れ落ちる。
なんて綺麗な髪なのかしら…ちょっと癒される。
「はじめ…」
うっとり撫でていると、ルーが話し始めた。
「なに？」
ルーはクルンっと私の方に寝返りを打ち、私の腹部に顔を埋めた。
「来週から学校へ行け。」
もう嫁に行ったんだから勉強しなくて済むと思ってたのに…
「えっ何で？」
私は理由を聞く。
「馬鹿な女は嫌いだ。」
そうですか…自分勝手な理由だな。
「……くぅ。スースー。」

？いきなり寝息を立てるルー。えっ寝ちゃったの？
「王妃様。」
ロウが話しかける。
「王は昨晩一睡もされていません。」
「えっ寝てないんですか？」
ビックリしてルーの顔を見る。確かに顔色が悪い様な…
「王妃が失神してしまってから、王はずっと王妃の側を離れようとなされなくて。」
ロウは頬笑みながら教えてくれた。
「王妃が目を覚まされなく、心配で付き添っていたのです。」
ただ失神してただけなのに…ルーって…子供みたい。
「ルー。」
私はルーが愛おしくて、頬にキスをする。
寝ているルーを起こさない様にそっと離れた。

私はロウから色々な話を聞こうと思って応接室の様な部屋へ行った。
「あの、ロウさん。ルーのご両親は何処に居るんですか？」
私は一度挨拶をしたくて尋ねてみた。
「先代の王はお亡くなりに…。」
「そうですか…じゃあお母様は？」
ロウは答えにくそうに教えてくれた。
「先代の王妃は…ルーシャ様をご出産直後お亡くなりに。」
…ルーって両親共居ないの？可哀そう。
「そうなんですか…」
私は少し暗い気分に陥る。
「あの…王妃様…。」
ロウがオズオズと喋る。
「何ですか？」
「大変申し上げにくいのですが…私に敬語はご遠慮頂けないでしょうか…」

「えっ何でですか？」
私はロウに尋ねる。
「貴方様は王妃。私は執事で御座います。身分の高い方から敬語で話されるのは…」
「でも…貴方は王のお兄様では？身分で言ったら私なんかよりもっと高貴な…」
私は失礼を承知で話す。
「確かに産まれはルーシャ様の兄でございますが、私には生まれつき魔力があまり無いのです。
魔力が低い王族は本来家族から引き離され、普通の人間として生きていく定めなのです。
でも私は現王のルーシャ様のご厚意で今もこの屋敷に住んで居られるのです。
私にとってルーシャ様は王であり、絶対の存在なのです。」
口調から、ロウがルーを慕っているのが分かる。ルーって以外にいい奴なのかも。
少ししんみりしてしまった。私は話題を変える。
「ルーって一体何歳なの？」
「分かりやすく言えば…2歳位でしょうか…。」
「にっにっ二歳？」
二歳って…私は二歳の子供に抱かれてたの？やっ嫌だ！！信じられない。
私が口をガタガタいわせていると、ロウは頬笑みながら言う。
「人間の年に直せば…大体２５歳位でしょうか。」
「あっ猫年の数え方ね。」
少し安心した。二歳はちょっとね。
その後も色々ロウに獣人の話を聞いたり王族の話を聞いたり…
あっという間に午後になっていた。
「王妃様、そろそろ仕事に戻らなくては…」
ロウはスイマセンと言わんばかりに伏し目がちに切り出す。

「あっ引きとめちゃってすみません。」
「いえっ王妃様とこうやってお話が出来て光栄でございます。」
ロウが深々と頭を下げる。
私もつられて頭を下げようとしたが…堪える。昨日のロウの言葉を思い出したから。
王妃は簡単に頭を下げない。
いくら王の兄でも、今は執事として生活しているのなら。
きっと簡単に生き方を決めた訳では無いだろうし。
ロウを困らせない様に、私もルーの兄という考えは捨てよう。その方がいい。でも…
「あの…ロウさん。」
「はい？何でしょう王妃様。」
「その…王妃様って止めてもらえませんか？」
「えっお気に触りましたか？」
ロウは焦っている。そうじゃなくて…
「あの、肩書きは王妃なんですが、恥ずかしいと言うか、柄じゃないというか…」
モゴモゴ話す私を見て、
「クスッあっ申し訳ありません。では何とお呼びすれば？」
微笑しながら答えるロウ。爽やかすぎて眩しい。
「じゃあ…はじめ！」
「はっはじめ…様ですか？」
「うーん、様は我慢します。じゃあ…はじめ様で！」
私は了承する。二人で笑い合った。
ロウって不思議な人…全身黒ずくめなのに真っ白な肌で…
王族っぽくない優しい空気…笑うと目なんか凄く細くて。
私はすっかりロウに心を許した。

私は昼食を出してもらって、美味しく食べた。
また豪勢な食事で…絶対に太りそう。

食後のデザートも申し分ない。至れり尽くせり！！
王妃様サイコーー！大満足で食事を終えた。

今朝、起きた部屋は私の夫婦の寝室らしい。
さっきルーが寝ていた部屋はルー専用の寝床。主にお昼寝用。
私はロウに夫婦の寝室に送ってもらった。
廊下でも私とロウは楽しく雑談しながら向かっていた。
「ねぇ、私とルーって夫婦なんだよね？」
「はい。王族にも許しを得ましたし、紛れも無くお二人は夫婦でございます。」
「じゃあ、人間の結婚式はやらないのかな？それに婚姻届は出してあるのかな？」
「結婚式は通常、獣人は行いませんが…婚姻届も今は無いかと。」
「えっ結婚って普通届を出すんじゃないの？」
「はぁ、人間はその様に行いますが、我々獣人に戸籍は存在致しませんので…。」
「えっ獣人って戸籍無いの？」
「はい。あった所で意味は成しません。我々の寿命は通常２００年程ありますので。」
多少の事では驚かなくなったけど…貴方達は２００年生きるんですか…
って事は確実にルーより先に死ぬのね…なんだか寂しいな…
「昨日、一番最初にはじめの香を嗅いだ初老の男性、かれは王族の長老で、御年３００歳です。」
「さっ３００？」
凄いなぁ…なんか別世界。
「獣人は１５０歳を過ぎた頃より、急に老化が始まります。
それまでは皆、若々しい容姿をしております。」
「へー、凄い話だなぁ。ちなみにロウは何歳なの？」
「私ですか？９０歳でございますが…。」

「あっそっそうですか…」
結構おじいちゃんですね？口が裂けても言えないけど…
私とロウは寝室に着いた。

私はロウに携帯を手渡される。
「これ…何ですか？」
「はじめ様専用の携帯でございます。主にルー様との連絡になりますが、
　私共執事やメイドに御用がある時にもお使い下さい。」
「あっ有難う。」
私は携帯をポケットにしまう。
「来週からお使いになられる御制服はそこのクローゼットにお入れして御座います。」
物凄く高そうな箪笥を指差す。
「はい。分かりました。何から何まで…」
私は軽く会釈をする。この位なら良いよね？
「では、私は仕事に戻りますので、失礼いたします。」
ロウは深々と頭を下げ、部屋を出て行った。

私は物凄く大きなベットに飛び込んで…ボーっとしていた。
昼寝が得意の私だけど、急に変わった環境、落ち着かない広い部屋。
なかなか寝付けなかった。
暇。暇すぎる。この部屋にはテレビは無いの？
私は屋敷散策に出かける事にした。

変態猫（前書き）

かなり大人表現あります。

しかし…なんて広い屋敷なんだろう。
私は一階の部屋を見ただけで疲れる。都内にこんな馬鹿デカイ屋敷をもつ獣人って…
多分、私なんかじゃ理解出来ない位お金持ちなんだろうな。
私は二階を見るのを諦めて、気持ち良さそうな庭に出てみた。
庭っていっても森林公園のような広さ。池まである。
庭に置かれたベンチに横たわり、気持ち良い空と澄んだ空気を楽しんだ。
「ここって…サイコー！！」
私はすっかり庭が気に入った。

「……はっ！！」
あまりの心地よさに爆睡してしまった私。いつの間にか空は薄暗い。
私は寝室に戻る事にした。
ブルルル…携帯のバイブが鳴る。音量って無くしたんだっけ…
私はポケットから携帯を取り出し、電話口に出る。
「はい。」
「早く来い。ブッ…ツーツー。」
一言で切れる電話。ルーの声。相変わらず口数が…
「来いって…何処に行けばいいのよ…。」
ルーは来いしか言ってなかったので、私は何処に行けばいいか分からなかった。
取り合えずルーのお昼寝部屋に行ってみた。…居ない。
なら寝室？…ここにも居ないじゃない。もう！何処よ馬鹿猫！！
私は仕方なくロウに電話した。
「あの、ルーから来いって電話があって…でも、何処に行けばいいのか…」

「ルー様は食堂でお待ちです。」
「あぅ、すみません。」
私は携帯を切った。言われてみれば夕飯時。初めから食堂に行けば良かった！
私は小走りで食堂に向かった。

「遅い。」
不機嫌そうなルーの声…怖っ。
私はちゃんと場所を指定しろ！って言ってやりたかったけど、行った所で無駄そうなので止めた。一言謝って食卓に着く。
ルーは食事中も一言も口を利かなかった。そんなに怒ってるの？
「ねぇ…ルー？」
「……。」
話しかけても無視。ちょっと冷たく無い？
私は胸が締め付けられる…なんだか涙目になってきた。
「あの…はじめ様…王は心配なされてたのです。」
ロウが助け舟を出す。
「えっ？」
「王が起きられた時、側にはじめ様が居られなかったので…」
ロウは説明して、直ぐに後ろに下がった。
「チッ。」
ルーは顔を赤くしながら舌打ちを打つ。あっズバリ言い当てられた感じ？
「ロウ…覚えとけよ。」
ルーは真っ赤な顔で食事を続けた。ロウはクスクス笑っている。

食事が済み、私はルーの「行くぞ。」の発言に従い、お風呂に向かった。
ルーって毎回一緒にお風呂に入るつもりかしら…ちょっと勘弁してもらいたい。

お湯はヌルいし、何人も見てるし…
浴室に入るなり、昨日の様に服を脱がされるルー。
そして当たり前の様に体をメイドに洗わせる。ちょっとヤキモチ。
ってか結構ヤキモチ。
その場では何も言わなかったけど、何時か止めさせよう。
私が考えていると、メイドさん達が私の服を脱がせに遣って来た。
私の服に手が掛る…ちょっと！
「スっストップ！！」
私の声にメイドさん達は手を止め、顔を見合わせている。
「あの…自分で脱げますから。」
私は服を脱ぎ始める…嫌だけどさ。
「あっあの…王妃様のお手を煩わせるなんて…。」
メイドさんの一人が焦っている。ルーに伺いを立てるように顔を見る。
「……よい。」
ルーの一言にメイドさん達は後ろに下がった。
私は体を手で隠しながら浴槽に入った。
「来い。」
ルーは端っ子に座る私に声を掛ける。
オズオズと近づく。
ルーは何をするでもなく、そのまま湯に浸かっている。気まずい。
「あの…ルー？」
「何だ。」
「あのさ、せめて二人で入れない？お風呂。」
「…なぜだ？」
「だって…恥ずかしい。」
「……ぷっ変な女だ。」
ルーはメイドさん達に視線を向け、顎先でドアを指す。メイドさん達は出て行った。
「……あの…ルー？」

「まだ何かあるのか？」
「あの…ロウは？」
私は浴槽の淵に立っているロウの視線を向ける。
「……ロウは駄目だ。」
「えっでも…。」
女の人より、若く美しいロウにま見られる方が恥ずかしいんですが…
私はロウの顔を見る。
申し訳なさそうにロウは目を下に向ける。
「ねぇ…私、ロウに見られるのが恥ずかしいんですけど…仮にも私は妻だし、
ルーは自分の妻の裸が若い男の人に見られても平気なの？」
「……ロウは別だ。」
一言で黙らされる。そうですか…何を言っても無駄だな。
私は諦めて、首まで湯に浸かった。あーぁ…熱いお湯に入りたい…
ブクブク…

「……ロウ。」
ルーが冷たくロウを呼ぶ。
「はいっ。」
ロウは緊張してルーに近づき、淵に跪く。
「お前…なんで妃をはじめ様と呼ぶ？」
ルーが冷たく低い声で話す。
「あの…はじめ様のご要望で…身分も顧みず申し訳ありません。」
ロウは頭を下げ続ける。そんなにマズかった？
「……分かった。」
ルーは冷たく言うと、いきなり私の髪の毛を掴んで、自分の方へ引き寄せる。
「あっ！んっんん！！。」
ルーは力一杯私の口を吸い始めた。
あまりに強い吸引で、私の身体は一気に熱を帯びる。

「んっふぅっ……はぁはぁ…。」
私はようやくルーから解放されて思いっきり呼吸をする。
そしてまたルーは私の口の中を吸い始めた。怒りをぶつける様に…
「んん！！！ふっん…。」
息が苦しい…逃げたいけど、ルーは私の髪を掴んでいるから動けない…
私は足をモジモジさせて…すると、ルーは空いている方の手で私の身体を触り始めた。
「ふぐっ！！んあぁ…。」
いきなり触られて…お湯の中なのに感じてるのが分かる。
ルーは私を浴槽に座らせる…ちょっロウに丸見えじゃない！
私は逃げようにもルーが抑える力が強くて…両手で顔を隠した。
ルーは一向に私を責めるのをやめてくれない。
そればかりか…私をロウの方へ向かせる…全部が丸見え…
ロウは思わず顔を背ける。私も恥ずかしさのあまり顔を手で覆う。
「ロウ…顔を上げろ…。」
ルーは命令を下す。
「……はっはい…。」
ロウは震えながら前を向く。ロウの視界に私の全部が…
「許す。堪能してみろ。」
「でっでも…。」
ロウは躊躇う…そんなロウにルーはもう一度命令を出す。
「王が許したのだ。」
「……はいっ。」
ロウは私の身体に顔を近づけ…ペロッっと舐めた。
「ひゃんっ！！！」
私は全身をビクンッと跳ねさせる。
「……すっすみません…」
そのすみませんの意味…それは我慢できませんって意味。

ロウは思いのままに私を堪能した…

もう…我慢出来ない…

「いやぁぁぁ！！！！」

私は悲鳴を上げて弾けた…

同じ時、ロウは私の一番濃い蜜を飲み込んだ…

私は力無くルーの胸に体重を掛ける。変態猫共の所為で力なんか入らない。

濃い液を飲んだロウは全身を痙攣させて倒れ込んでいる。

私はトロンとした視界の中に、失神しているロウを見つける。

「はぁはぁ…あれ、なっ何でロウは倒れてるの？」

「……お前を味わって倒れずに抱けるのは、俺位だ。」

まっまさか…ロウが呼ぶ、はじめ様って言い方に嫉妬してたの？うっそ…

もしかして、私は馬鹿猫の見当違いの嫉妬の為に…こんな痴態を晒したの？信じらんない！！

この馬鹿猫！！変態猫！！化け猫ーーーー！！！

ルーは倒れたロウを満足そうな顔で見下ろし、とっとと風呂を出ていく。

なんか…ここまで我儘だと思わなかった…この先、やって行けるかしら…

お風呂から上がった私は寝室へ帰った。

こんな調子で一生過ごすのか…耐えられるかな？

長い廊下を歩き、漸く寝室へ着く。

寝室の扉を開けると、ルーが私を待っていた。

「ルー…。」

私は睨むようにルーの顔を見る。

「？何だ？何故怒っている。」

ルーってば…本当に分からなそうな顔してる。

「もう、二度としないで！あんな事…」
私は涙を溜めて抗議する。
「？？何かしたか？」
ルーは頭を傾げる。
「分かんない？さっきお風呂で私とロウにした事！！もうしないで…。」
「…もしかして、恥ずかしいのか？」
「はっ恥ずかしい？？そんなレベルじゃない！」
「？そうなのか？王が家臣に蜜を与えるのは普通だと教わった。」
…どんな教育を受けたのかしら…
「…はぁ、もう良いよ。あのねぇ普通の男女は、ペアーの裸を自分以外の異性に見せないよ？
　まして…なっなっ舐めさせるなんて問題外！！」
「！！！！。」
私が勢いよく話すから、ルーは目を丸くしてビックリしてる。
「…あい分かった。今度から二度としない。」
ルーはシュンとして下を向く。かっ可愛い！！！！
何時もは王様全開のルーが私に叱られ落ち込んでる…快感！！！
「でも…」
「でも…何？」
「ロウは叱らないでやってくれ…。」
ルーはロウを気遣う。
「…まぁ。ルーに命令されて仕方なくだもんね。」
「最初はな。途中から本気で吸っていた。」
…怒って欲しいのか許して欲しいのか分かんない言い方。
「ロウは可哀そうなんだ。」
「？魔力が薄いから？」
「…それもあるが。最初、王位を継ぐのはロウだった。でもルーが生まれて…
　ルーの方が魔力が断然上だった。」

断然っとか、自分が一番良いなんて加えるのは、やっぱり猫気質なんだろうか。
「ルーはロウが大好きなんだ。たった一人の家族なんだ。許してやってくれ。」
…ルー、やっぱり寂しいのかな？
「じゃあ、なんで私とロウにあんな事したの？気まずいんですけど…」
「最初はロウと中が良い事に腹が立った。はじめはルーの妻なのに。
でも最後はどうでも良くなって…ロウにもはじめの味、教えたかった。」
それが本当の気持ちなら…少しは救われる。
ルーは下を向いたまま顔を上げない。本当に落ち込んでるみたい。
もう、可愛い所あるじゃん！
「…ルー？」
私は優しく話しかけると、ルーは嬉しそうに顔を上げた。
「なっ何だ？」
「…猫になって。」
「…猫か？」
「一晩、猫の姿で私と一緒に寝て。」
「…猫のままだと、はじめを抱けない。ヤダ！。」
「…本当に悪いと思ったなら変身して。一晩元に戻らなかったら許してあげる。」
「…本当か？」
ルーは目をキュルンっとして聞いてくる。胸の奥がキューンとする。
「うん、本当。だから…早く！」
「……分かった。」
ルーは大きく伸びると変身を始めた。
みるみる全身に真っ白な毛が生え、瞬く間に美しい猫の姿に戻った。
「きゃーーー！！！可愛いーーー！！」
実は私…猫の姿のルーが忘れられなくて…

気品あふれる姿、流れる絹の様な毛並み、気高い顔。
撫でるとサイコーに気持ち良い。
「うわぁ…なんて綺麗なんだろう。」
思わず言葉に出す。
「ニッニッニャー！ニャーゴ！！」
一生懸命ルーが喋ってるけど…何言ってるか解んない。
私は猫の姿のルーを胸に抱き、ベットの中に潜っていった。

ルーの肌触りは最高で、私は直ぐに眠りの中…
最初は頑張ってルーの背中を撫でていたんだけど…それがまた眠りを誘うというか…
私は大満足で眠りに入ったけど、ルーは大不満足みたいにニーニー鳴く。
私はルーを無視して寝ちゃったけど…ちょっと起きてれば良かった。
不満足のルーは器用に私のパジャマの隙間から顔を突っ込み、私の股間付近でフゴフゴ…
牙で器用にズボンを脱がし、私をペロペロ舐めはじめて…
「いっ痛痛痛！！」
私は飛び起きた。なっなんかアソコがヒリヒリする…
猫ルーは私に向かってベーー！っと舌を出している。ザマー見ろ！って言われてるみたい。
あっ！そういえば…猫の舌ってザラザラしてるって聞いた事ある。
もう！！
私は怒ってふて寝する。もう知らない！！！
ルーは一瞬怒った顔をして…直ぐに落ち込み、その夜は何もしてこなかった。

起きた時、隣には丸まって寝る猫ルーの姿があった。
猫ルーは私の横にピッタリ背中を付け、気持ち良さそうに寝ている。
私はその姿が可愛過ぎて…

「ルーーー！！！」
っと、寝ているルーに飛び付いた。
「ニッニャァァ！！」
ビックリしたルーは全身の毛を逆立て腰を抜かした。ごっごめん…。
「ニャニャニャ！！！」
ルーは一生懸命怒ってる。でも猫の姿で怒られても怖くない。むしろ可愛いです。
「ごめんねルー。」
私は怒っているルーの顔を掴み、ルーの可愛い口にチュッっとキスをした。
ルーは黙って受け入れた。ルーの尻尾が左右に揺れる。

朝食を済ませ…やる事が無い。暇だ。
学校に行けと言われて丁度良かった。この屋敷は暇すぎる。
でも今日は木曜日、来週の月曜まで長いな…どうやって暇を潰す？
昨日ロウに、王妃は極力家を開けない！っと釘を刺されてので、外出は出来ない。
私はウロウロと屋敷を彷徨った。

ルーが何時も寝ているお昼寝部屋に行ってみた。
ルーはそこに居なかった。ちょっと残念。
私は昨日断念した二階に上がってみた。
二階は主に王族の執務をこなす部屋が揃っていた。
どうして王族の仕事部屋だと分かったのって？
だって…ルーが仕事してたから。

ルーはビシッと服装を決め、巨大モニターの前で何やら話しこんでいる。
出てくる言葉は…日本語以外。何語かすら私には理解できない。
多分、衛星中継か何かだろう。モニター画面の右下に国旗の絵が書

いてあって、
画面が切り替わり、ルーが喋る言葉が変わると、画面の国旗も変わった。
ルーが言ってた、馬鹿な女はってヤツ。ルーの言う馬鹿女って何処のレベルなのかしら…
日本語以外話せない私は一生馬鹿女扱いかも…

私は本当に暇だったので、今日一日、ルーの後を追ってみる事にした。
ルーは衛星中継を終わらせると、なにやら机に山積みの書類を読み始めた。
書類を凄まじい早さで読み終わると、隣の部屋へ入って行く。
何やら怪しい薬瓶を握り締め…目を閉じブツブツ呟く。
白衣を着た人が、ルーに次々と瓶を手渡す。
そんな事を何回か続け、部屋を出ていく。
私は物陰に隠れ、そのままルーの後を追った。
一階の応接間に移動して、何やら待っていた人と話し始めた。何の話か…難しくて理解不能。
その後もルーは色々屋敷内で仕事？らしき事をして…時間で言えば昼の三時頃、
フラフラした足取りで、真っ白なお昼寝部屋に入って行く。
何気にハードそうな一日を送っているルー。でも…
忙しく動き回るルーの姿は新鮮で…私は益々惚れ直す。
この人で良かった。

愛してる

ルーが起きてきたのは夕飯時。
私が一足先に食卓に着き、すぐ後にルーがやって来た。
「お疲れ様！」
私はグラスに入っているワインを差し出す。
「？？あぁ…。」
ルーは意味が分からんっという顔をしたけど、自分もグラスと手に取り重ねる。
二人して一気に流し込み、食事を始める。

「ねぇ…ルー。」
「何だ？」
ルーは口をモゴモゴさせながら答える。
「ルーって毎日何やってるの？」
私は、自分が今日一日ルーの行動を見ていた事を伝える。
「…監視だ。」
まだモゴモゴさせているルーが答える。
「かっ監視？」
「…世界中の獣人が問題起こしていないか監視している。」
「あっそう。っで、監視してて、もし問題のある獣人が居たら？」
「…魔力でぶっ飛ばすか、制裁を加える。」
モグモグと口を動かしながら恐ろしい事を言う。
「そっそうなの？」
私は聞かなきゃ良かった！っと思う。
「王の大事な仕事だ。」
「そうなんだ…。」
「王は、他の獣人より力が強くなくては務まらない。

獣人に制裁を加えられるのは、王だけだ。」
ルーの魔力って本当に凄いんだ…でも、縛るだけで制裁って可能なのかな？
「ルーはどんな魔法が使えるの？」
興味深々で尋ねる。
「…色々。」
一言で終わる。
「…はじめ様。」
ロウが後ろからコソコソ話しかける。
「何？」
「王の魔力の全部を知ってはなりません。王はそれを知られたら王では居られません。
他の獣人に知られたら、それは王室全体の危険を意味するからです。」
「そうなの？」
「たとえ、王妃様でもお教えする事は出来ません。獣人の中には、相手の心の中を見る事の出来る者もおります。もし王妃の心を覗かれたら…。
王の力を知れば、はじめ様自身、危険が及ぶかもしれません。」
「あっそっか…でも、ルーの心の中は覗かれないの？」
当たり前の質問をした。
「それは絶対にありません。魔力の強い者なら、自分の心を覗かれない魔法が使えます。
王族は皆、大抵使えます。勿論私も。」
「じゃあ、ロウはルーの力の全てを知ってるの？」
「いえっそれはあり得ません。例えば私が瀕死の重傷を負ったりした場合、
一時的に魔力が弱まる場合があります。そんな時の為、王は絶対に人に能力は教えません。」
「そんな事あるんだ。じゃあ、ルーの魔力が弱まる事は？」

「あり得ません。王より強い者など存在しません。」
自信タップリに言いきる。そんな凄いんだルーって…
「何を不吉な話をしておる。」
ルーはナプキンで口元を拭きながら言う。
「出過ぎた真似を…」
ロウが頭を下げながら退る。
「風呂に行くぞ。」
「まっ待って！まだ全部食べてない！！」
私は急いで食事を口に運ぶ。
「ふんっ無駄話などしておるからだ。」
ルーは無視して歩いて行った。

私は急いでルーの後を追った。
ルーは浴槽の前で仁王立ちして待っていた。
「遅い。」
不機嫌なルー。
「もうっ先入ってれば良いじゃない！」
「何を言ってる？誰がルーを脱がすんだ。」
「はっはい？」
「早く脱がせろ。」
「じっ自分で脱いでよ！！」
「王は自分で脱がん。それに、メイドを追い払ったのは、はじめだろう。」
「あっ。」
確かに昨日そんな事言った様な…
「はいはい。分かりました。」
私はルーの腰ひもをシュルリと解き、真っ白な布を剥ぐ。
布の下からは、ルーの美しい身体が姿を現す。
「こっこれでいい？」
「あぁ。」

ルーは一言呟くと、浴槽の中に身を沈めた。
「…何してる。早く入れ。」
やっぱり私もは入るのか…
私も服を脱ぎ、浴槽の中に入る。
メイドは居なくなったが、浴室内にはロウが佇んでいた。

ルーは少しお湯に浸かると、急に立ち上がり浴槽の淵に腰を掛ける。
「はじめ…体を洗え。」
「かっ体も？」
「はじめがメイドを追い払った。」
「もう！分かったよ！！」
私は渋々ルーに近づく。
スポンジにシャンプーを付け、ルーの体を擦った。
「痛い。」
「はいはい。」
ルーの体を撫でるように洗う。なんて我儘な王様なのかしら。
背中を洗い終えて…気付く。もしかして前も？
ルーは自分の股間を目で射し、洗えと言わんばかりに足を開く。
ふぅっと息を吐き、私は前に取りかかる。
もう一度、たっぷりシャンプーを付け、思いっきり泡立てる。
せめて直視は避けたい…
泡でルーのアソコを隠し、スポンジで擦った。
「ちゃんと手で洗え。」
やっぱり…ってか、メイドさんにも手で洗わせてたのかしら…
なんか腹立ってきた。
「メイドさんにも手で洗わせてたの？」
聞かずには居られなかった。
「そんな訳無いだろう。王自身に触れられるのは選ばれた者だけだ。」
「んじゃ、今までどうしてたの？」

「股は自分で洗ってた。」
「じゃあ今日も自分で洗ってよ！！」
私はスポンジをルーの手に置く。
「やだ。」
なんて我儘！！！
「やっとルーにも洗ってくれる人が出来たのに…」
ルーはシュンとする。なんか計算ずくの行動にも見えたけど…
「……んもう！！わかったよ！」
私は泡の中に手を突っ込んだ。
ルーは息を一瞬乱す。ルーが少し硬くなる。
「きゃっ嫌！」
私は手を離す。
「もっもう十分でしょ？」
私はドキドキを隠す様に湯船に飛び込む。
「感じているな？」
ルーが二ヤリと笑った。
「なっそんな事ないわよ。」
「匂いがする。良い匂いだ。なぁロウ？」
ルーはロウに同意を求める。
「はっはぁ…。」
ロウは下を向いたまま答えた。

私はさっさと風呂から上がる。またエッチな事されたら堪らない！
先に寝室に戻る事にした。
少し遅れてルーが入ってくる。
ルーは寝室に入るなり私の上に直行。
ルーは被さるなり、私の口を吸う。
ルーの絶妙な舌使いで、私の身体はすぐに感じる。
「もうよい香りがするな。」
ルーは素早く私の下半身を露出し、いきなり虐めはじめた。

「ルッルー！！」
私はルーの頭を押さえ、ストップをかける。
「何だ？」
ルーはいきなり止められ、自分の舌を出したまま私の顔を見た。
「あのさ…嫌って訳じゃないんだけど…」
「…なにが不満だ？」
「初めてちゃんとベットでするなら、もうちょっとロマンというか…フインキというか…」
普通の恋人のようなＳＥＸってしてもらってない！！私の不満はソコ。
「？？？」
ルーは舌を出したまま、理解不能な顔をしてる。
「もう少しムードとかさぁ…。」
正直に打ち明ける。こんな事女の方から言わせるなんて…
「ムード？必要か？」
「あっ当たり前だよ！！」
「…ムードを出すと、より妊娠するのか？」
「にっ妊娠？…ねぇルー、ルーは何で私とエッチするの？」
そう言えば、ルーと会ってからというもの、毎日の様にＳＥＸしてるような…
私は、ルーが私を欲っしてだと思ってたけど、いまいち不安。
「……世継ぎを作るのは、王としての最大の課題だ。」
「よっ世継ぎ？」
私は子作りの道具なのかな…ルーは私の事、どう思ってるんだろう。
私は何だか空しくなって、泣けてきた。
「…なぜ泣く？」
ルーはオロオロ。
「…別に。ただ、ルーは私の事…どう思ってる？」
込み上げる空しさ…涙が本格的に流れ出す。
「はじめの事？王妃だと思ってる。」

「違う！私の事好きか嫌いかって事！」
「？変なはじめだ。好いているに決まっている。」
「だから、好いてじゃな…へっ？」
「だから、ルーはちゃんとはじめが好きだ。そんな事考えてたのか？」
ルーは笑って頭を撫でる。
「だって…いきなりの結婚だし…不安だったの。
私にはもう、ルー以外頼る人居ないし…」
実は私、不安だった。この屋敷でルーに愛想尽かされたら…
せめて愛だけでも真実ならって…
「馬鹿なはじめ…ルーは、はじめだから王妃にしたんだ。」
「私…たまたまルーの魔力に耐えられただけかと思ってた。」
これは私の正直な気持ち。
「はじめはルーの物。ルーは、はじめの物だ。」
ルーは私の目を見て、真剣に答えた。信じても良いかな？
「ルー…有難う。」
私からルーにキスをした。
その日ルーは何もせず、私を大きな腕の中に抱いて眠った。

私は学校が始まるまでの間、ずっとルーを観察したりして過ごした。
ルーがお昼寝の時は、ロウが私の話相手になってくれた。
毎日一緒にルーと食事をし、毎日一緒にお風呂に入り…
ルーは毎日私を抱いた。とても優しく…

今日は朝からワクワクしてた。今日から学校に復帰する。
ルー機嫌は最悪だったけど…
ルーが学校へ行けって言ったくせに、いざその時が来たら面白くないらしい。
私は、絡みついてくるルーを剥し、いそいそ準備を始める。
学校で使う物は全部、ロウが手配してくれた。

教科書とかノートは実家に取りに行ってくれたらしい。
無断欠席してる学校や、心配してる友達にもロウが説明して（縛りをかけて）くれた。
私は以前と同じように学校へ通えるらしい。
本当に何から何までロウが済ませてくれる。

ルーは私の支度が終わるのを、ベットの上から見てる。
伏せ！の格好で…笑える。
普段は王様でも、最近二人の時は可愛いく甘えてくれる。
スーパー二重人格…二重猫格。
私しか知らないルーの可愛さ…私の唯一の自慢。
ルーは私の身支度が終わるのを待って飛びついて来た。
大きな男に組敷かれる…ルーは私の首筋に熱いキス。
折角着替えたのに！髪が乱れるよー！
「ちょっルーー！」
私はルーの顔面を手で押し、引き離す。
「遅れちゃうよ…。」
ルーはショボンとし、私の上から退いた。
「ルーが学校行けって言ったんでしょ？」
「しかし…はじめが楽しそうに準備するから…」
我儘猫！……可愛い馬鹿猫。
「行ってくるね。」
私はルーの鼻先にキスをして部屋を出た。

私はロウが運転する黒尽くめの高級車で学校へ送ってもらった。
ロウは学校の門の前に車を横付け…目立つんですけど。
案の定、生徒たちは車をチラチラ見ながら学校へ入って行く。車から降りづらい。
ロウは車から降り、私の為にドアを開ける。
「お待たせ致しました。」

ロウは手を差し出し、私はロウの手を借り車から降りる。
ちょっと…スーパーお嬢様みたい！！
ロウは下校時間に迎えに来ると言い、深く頭を下げる。
私は久しぶりの学校にスキップで入って行く。昭和か？

久しぶりの教室、久しぶりの学校の匂い…
そんなに離れてた訳じゃなのに、懐かしく感じるのは、あの屋敷で生活してるからだろう。
自分の机に教科書を入れ、席に着く。
「はじめー。」
後ろから首を絞められる。
「うぐっ…恭子？」
私の首を絞めたのは橘恭子。ちょっと気楽な性格の、私の大親友だ。
「ちょっと…なによあの車とイケメン！！」
どうやら朝の光景を見ていたらしい。
「何って…執事？」
はぁー？っと何か言いたげな恭子。口を開けたまま。
ロウって何処まで縛ってくれたのかな？それによって返事が変わるんですけど。
「なんか宝くじが当たってね！一日だけ！今日だけだよ。」
わっ我ながら苦しい良い訳…
「へーっそうなんだ。」
しっ信じた！さすがお気楽少女。
「あのイケメン誰よ？」
恭子の興味は車よりそっちだった。
「誰って…ロウ？」
「ロウ…ロウ様って仰るのね！！…あんたの何？」
「何って…執事？」
「ボケないで真面目に！！」
恭子が足をバタつかせて急かす。真面目に執事なんだけど…

「いっいっ従兄！！」
「いーとーこー？聞いた事無い。」
…しまった！小中高一緒の恭子に親戚の嘘は無理があったか？
「うっうん！従兄だよ。海外に住んでた。話ししなかった？」
私の苦し紛れの一発。
「うーん…聞いた様な、聞いてない様な…まっいっか！！今度紹介してね！」
恭子がお気楽ちゃんで助かった。

私は久しぶりの学校を満喫する。友達と食べるランチ、退屈な授業。学校がこんな楽しいなんて…
一日の授業が終わり、ＨＲ。先生の話が始まる。大半はどうでもいい話。でも最後に…
「えー、明日転校生が二人来るので、皆自己紹介を考えるように。」
時期外れの転校生かぁ…どんな人なんだろう。ちょっと楽しみ！
私はロウの運転する高級車で屋敷に帰った。

とりあえず寝室で普段着に着替える。鞄を置き服に手を掛けた瞬間、ルーが飛び込んでくる。
「はじめー！」
ルーは勢いよく飛びかかってくる。ルーの勢いに負け倒れる私。
「ルー…寂しかったの？」
ルーの頭を撫でながら抱きしめる私。
「そっそんな事はない。ルーは王だ。」
王って関係ないような…
ルーは私の顔をマジマジ眺め、チューっと可愛くキスをする。
そんなルーが愛おしくて、私もチュッっとお返しをする。
二人で顔を見合い、長く激しいキスに流れ込む。
ルーの息遣いが鼻に掛り、私はルーの吐いた息を吸い込む。優しい香り。

キスは燃え上がり、私は興奮してきてしまった。
ルーは私の匂いを敏感に嗅ぎ取り、すっかり興奮している様子。
ルーは寂しかったと言わんばかりに激しく私を愛した。

「あぁ…はじめ…」
「ルっルゥーー！！はっはっんん！きっきもち…」
「はじめ…あっ愛してる…」
「はぁはぁ…ルー、私…もう無理…ねぇ、一緒に…」
ルーに、いかせてと懇願する。
「あぁ…一緒に達するぞ…」
ルーはそう言うと、激しく責め、私の中に愛を吐いた。

夕飯時、私は凄く気分が高まっていた。
初めて聞いたルーの愛の言葉。
愛してる…きゃーーー！！
食事中、ずっとニヤニヤが止まらない私。だって嬉しいんだもん！
ルーだって私を見て嬉しそうだし！なんか夫婦って感じ！
なんか、一気に距離も縮まった？うん、多分そう。
だって、今日のエッチ…すごぉーく愛されてるって思えたし。
そう、私が望んでいたのはこういうエッチなの。
やっとしてくれたねルー。大好きなルー…

その後も一緒にお風呂に入り、丁寧にルーの体を洗ってあげた。
一緒に湯船に浸かり、ずっと裸のルーに抱きついていた。
勿論その晩もルーは私を優しく抱いてくれた。
なんか順風乱満って感じ？もうサイコー！！
でも…そんな幸せの日は長く続かなかった…

プレゼント

教室に戻ると、マイクの姿は無かった。
「ちょっと！大丈夫？帰った方が良いよ…」
私を見つけた恭子が走ってくる。
「うん、もう大丈夫。」
私は笑ってみせる。
「もー…心配したんだからね！！でも…かっこ良かったー！ロウ様…はぅん！」
恭子が悶える。私を抱えて飛び出すロウがかっこ良かったんだって。
「あのさ…マイク…は？教室に居ないけど…」
私はマイクの所在を確認する。
「…誰それ…頭大丈夫？やっぱり早退したら？」
「いや…転校生のマイクだよ！！今朝紹介されたじゃん！！」
「…転校生はロウ様だけだよ…一、やっぱり帰りな！！」
マイクが…記憶から消えてる？嘘だとは思えないし…何で？
殺気といい、あのマイクって変！人間じゃない…気がする。
「ねぇ、ロウ…」
「はい？何でしょう。」
「…マイクが居ない…記憶から消えてる。」
「えっ？」
「マイクよ！転校生のマイク！！」
「…なんの事です？」
ロウも知らないと言い張る…どうして？

家に帰っても疑問で頭の中が一杯…
どうして知らない振りをするの？
「帰ったか…」
お昼寝していたルーが私を迎えてくれる。

「うん、ただいま。」
「……元気が無いな…」
ルーは元気の無い私を抱きしめてくれた。
「何かあったか？」
「あのね…なっ何でもない。」
ルーに相談しようか…一応強そうだし。
「…んっ？クンクンクン…。」
ルーは私の匂いを嗅ぎ始める。
「…ロウの匂い。」
…あっやっぱり動物の鼻は誤魔化せない…
「あっあのね！ロウが助けてくれた時に抱っこしてくれたから…かな？」
重要な個所を省く。
「クン…クンクン…」
ルーの表情が変わる。
「…違う…そんなんじゃない。これは…」
言いかけた時、ロウが部屋に入ってくる。タイミング最悪…
ロウは何も知らないで挨拶をする。
「ただいま戻りました。」
「…ロウ。ちょっと来い。」
ロウを呼びつける。
「…はじめ、部屋に戻れ。」
ルーが凄く低い声で私に命令を出す。
「あっあのね…わっ私からも…」
「！！はじめぇ！！」
全身が硬直する…怖い。
今まで見た中で、一番怖い…
「あっごめ…ごめんな…」
涙で言葉にならない…
「！！！！！」

ルーと目が合う…全身の自由が奪われる。
ルーは私に縛りを掛ける…もう…だめだ。
ロウとの事、ばれちゃった…絶対嫌われた。
ロウ…殺されちゃったらどうしよう…拒否出来なかった私のせいだ…
私はルーの言葉に体を奪われ、部屋を出ていく。

暫くして寝室にルーとロウがやって来た。
私は急いで立ち上がる。
「あっあの…ルー…。」
私はどう話を切り出したらいいか分からない。
「…大丈夫。」
そう一言言うと、ルーは優しく私を抱きしめる。
私はルーの肩越しにロウの顔を見る。
ロウは、大丈夫と目で教えてくれる。…良かった…でも、
「ルー…ごめんね？」
取り合えず謝る。謝って済む問題じゃないけど。
「…分かってるから。」
「…えっ？」
「ルーには全部分かってる。」
「…ルー。」
本当にごめんね…。
「そんな事より…。」
…そんな事？
「はじめ…体は？大丈夫か？」
「かっ体は本当に潔白です！！」
「？？倒れたんだろう？」
あっそっちか。
「うん、ロウが助けてくれたの。もう大丈夫。」
「うん、やはりロウに頼んで正解だった。」
「…なっ何を頼んだの？」

「今日会った男の事だ。赤い髪の。」
「マイク？」
「あぁ…あいつは獣人だ。」
頼んだって事は…やっぱり知ってたんじゃんロウ！
「ロウ！知ってたんだね！酷い！」
「…申し訳ありません。王にお伺いせずにお話する訳には…」
「…もう…あっ、ごめん。で、マイクは私に何かしたんでしょ？」
「王の話を中断するとは…」
ルーはちょっと不機嫌…話の腰折っちゃったから。
「ごっごめん！続けて？」
「ふんっまぁ良い。…マイクはお前の命を狙っておる。」
「…私、何かしたっけ…」
「違う。これからするのだ。はじめは唯一、王の子供を産める女だからな。」
「…まだ妊娠すらしてないのに…もしかして政権争いってヤツ？」
「あぁ。マイクはライオンの長だ。最近のライオン共は礼儀を知らない。」
…なんか、ライオンって強そうですけど。
「今まで王には弱点など存在しませんでした。強い魔力を持ち、誰一人逆らわなかったんです。
でも、魔力の無いはじめ様という存在に目を付け、馬鹿な謀反を…」
ロウは眉間に皺を寄せ説明してくれる。
「だからルーはロウに、はじめのガードを命じた。ロウならはじめを守れる。
ロウは信頼出来る。ロウは強い。」
「…信頼してるんだね。」
「当たり前だ！ロウは王の兄だ。王の次に強い。誰にも負けない。」
前に聞いた話と違う様な…
「…分かった。で、マイクは何処に行ったの？友達の記憶からも消

えてるし…」
「ロウを甘く見たんだろう。学校では手出しできないと分かって作戦を変えたはずだ。」
「…じゃぁ、また殺そうとするんだね…」
ルーに会ってから、死の危険ばかりだな。
「大丈夫だ。屋敷ではルーが守る。学校ではロウが守る。」
「…学校、行かなくても大丈夫だよ？」
勉強したくないし…
「それなら家庭教師を付けるが？」
…なんか一日中勉強やらされそう…
「…学校行きます。」
私は、これからも守ってね！という意味も含めロウに軽く頭を下げる。

それから暫くは平穏な日々が続いた。
毎日普通に学校に行き、帰ったらルーとラブラブ。

月日は流れ…寒い日が続く一月。
私は卒業を目前に控えていた。

ライオンの長、マイクはあれから何もしてこない。
私は襲われた事などすっかり忘れ、幸せな日を送っていた。

「ルー！！行ってきます！」
学校へ行く前にお約束のキッス。
高級車に乗り、ロウの見守る中、退屈な授業を受ける。
最初は高級車で乗り付け、ロウというイケメンに守られる私を、
（何アイツぅー！！）
位に見ていた友達も、今はすっかり恒例行事の様に受け入れていた。

私はロウと一緒に高級車に乗り込み、家に帰ろうとしていた。
実は…今日はルーの誕生日！
ルーは今日で４歳になる。（人間に換算すれば２０代後半位？）
私はプレゼントを買いに行く同行をロウに求め、ロウも了承してくれた。
何時もと違う帰宅コースを走る車。

「うーん、何が似合うかしら…」
私はルーに送るプレゼントを一生懸命考える。
「これなんていかがでしょう？」
ロウも一緒に考えてくれた。
結局私が選んだのは、真っ白な絹の肌掛け。
お昼寝中のルーに掛けてあげよう。…くふっ絶対絵になる！！
私は会計を済ませようとレジに並ぶ。
包装してもらっている最中、ロウの携帯が鳴る。
「プルルル…プルルル…」
ロウの携帯って、私と一緒の時は滅多に鳴らない。珍しいな。
ロウもビックリして携帯に出る。
「はいっはぁ…あっあの…音が…もう一度…」
近くで子供が遊んでいる所為か、音が聞こえにくい様子。
私はロウに静かな所で話す様に促す。
「しっしかし、はじめ様の側を離れる訳には…」
「大丈夫！！最近何も起こらないし！！」
私はロウの背中を押す。ロウは申し訳なさそうに席を外した。

実は私、肌掛け以外にプレゼントがあります。
多分、ルーが一番欲しがっている物。ってか者？
早く渡したいな！二つのプレゼント…
私は包装が終わった箱を受け取り、ロウを待つ。

ロウを待っている時、後ろから急に殺気を感じる。
「王妃様…」
後ろから声が聞こえる。
「お会いしたかった…」
なっ何??
私が振り向こうとした瞬間、私の口を覆うハンカチ。
私の視界が急に揺らぐ…

ピチャン…ピチャン…水の音…
聞きなれない音に私は目を覚ました。
周りを見渡す…薄暗い倉庫の様だ。ここどこ?
私は知らない場所に寝かされていた。
手足はロープで縛られ、身動きができない…私、誘拐された?
どうしよう…誰が私をこんな場所に?

「王妃…」
聞き覚えのある声…
私は声のする方へ視線を向ける。
「王妃、久しぶりです。」
「マッマイク…」
声の主はマイクだった。
「王妃、お会いしたかった。」
クククッと不敵な笑いを浮かべる。
「なっなんでこんな事するの!!」
私はマイクに向かって声を荒げる。
「なんで?ふっあはははは!!」
「なっなんで笑うのよ…」
「理由は一つしかない。ルーシャだ。」
「…やっぱり狙いはルーなんだ…。」

「あぁ。たかが猫の分際で王様気取りとは…腹立たしい！！」
ブワッっと殺気がみ漲る…とても息苦しい空間。
「我々はずっと力を持ちながら虐げられてきた…
　我々の方が王に相応しい…それなのに猫如きに支配なんぞ受けるのは真っ平だ！。」
声を荒げるマイク…
「今までは流石の我々も迂闊には手出しできなかったがな。でも貴様のお陰で王に隙が生じた。
　今この機会を逃す訳にはいかない。」
「…馬鹿じゃない？」
「…なんと言った。」
「馬鹿だって言ったのよ！こんな姑息な手でしか王に太刀打ち出来ないなんて…
　どうせまともに勝負する勇気もないんでしょ？弱虫の卑怯者！」
腹が立ってきた。マイクの自分勝手な良い訳。
毎日働くルー。王位を譲ったロウ。二人を馬鹿にしないで！！
「貴様…もう一度言ってみろ…」
「何度でも言ってやる！この…馬鹿卑怯者ライオン！！」
「今…馬鹿と言ったな？」
「あぁ！言ったわよ！何か間違ってた？卑怯者さん。」
倉庫中が殺気に包まれる…はぁはぁ…苦しくなってきた…
ちょっと言い過ぎた？でも、私は間違ってない！
「二人を馬鹿にするのは絶対に許さない！！」
私は息を切らせて声を張り上げる。
実は結構気を保つのに限界がきてたんだけど…。
「ほうっどういう風に許さないのか…教えて貰おう。」
腕を組みながら話すマイク。本当に自信タップリの口調。
「あんたなんかより、二人の方が強いもん！！」
「！！！漸く来たか…では、確かめてみるか？」
「確かめるって…」

マイクは倉庫のドアを顎で指す。
その時、バタン！！！っと大きな音と共にロウが飛び込んできた。
「ロウ！！！」
私は助けが来た事を素直に喜んだ。でも…
ロウって最初魔力が少ないって言って言ってなかった？
ルーがボディーガードに指名する位だから嘘だとは思ってたけど…
正直、どっちが強いか分からなかった。
「…はじめ様、申し訳ありません…」
「貴様…話す相手が違くないか？」
「ふんっライオン如きに遣られはせん。」
ロウの言葉に毛を逆立てるマイク…一触即発な状態…
「王には指一本触れさせない！！」
ロウの目付きが一瞬で変わる…こんなロウ見た事無い。
ロウの体から黒いオーラの様な物が見えた。それはマイクの方に飛んでいく。
「くぅっ。」
全身黒い何かで包まれるマイク…一瞬顔を歪ませる。
「くぅ…あぁぁぁ…はぁぁぁ！！！」
マイクは力を込めて全身の黒い物を弾き飛ばす。
「さすが…先代の王は強いな…」
…先代の王？それってどういう意味？
「まだまだ…これからだ。」
ロウはそう言って同じような黒い何かをマイクに飛ばす。今度はかなり大きい…
「ぐぁぁぁ…っ。」
叫び声を上げながら倒れるマイク…もしかして、勝った？
ロウは急いで私の元に駆け寄る。
「ロウ…有難う。」
「私こそ…警戒を怠った私の責任です。」
ロウは私を縛っていたロープを外しに掛った。

硬く結ばれたロープは簡単に解ける筈も無く、ロウはロープに自分の手のひらを当て、
呪文を唱え…焼き切った。
私は自由になった両手を擦りながらロウに聞いた。
「ねぇ、さっきアイツが言ってた先代の王ってどういう意味？」
「それは…私の魔力が少ないって…」
ロウの話の腰を折って私は喋りだす。
「もう嘘はいい…マイクは確かに先代の王って言ってた。確かに聞いた。」
「…分かりましたお話いたします。ですが一旦外に出ましょう。」
ロウは私の肩を抱いて外へ連れ出そうとした。
「いっ痛っ。」
縛られていた足首が痛みヨロヨロ歩く私…ロウは大事に支えてくれた。
「無理なさらないで下さい。ゆっくり参りましょう。」
ロウが優しく声を掛け、私はそれに甘える。

「ねぇロウ。ルーはこの事知ってるの？」
「はい、この場所を探し当てたのは王です。はじめ様の携帯のＧＰＳを使って。」
…そんな機能付いてたのね。なんかなぁ…
「でも、よく一緒に来なかったね。絶対飛んで来そうなのに…」
「…私が無理やりお止めしたのです。王はかなり取り乱しておられたので…」
「ロウって実は凄い人なんでしょ？王を止められるなんて…」
私はニヤニヤしながら言う。正体バレたぞー！みたいな？
「…腹部を殴ってしまいました…どんなお叱りを受けるか…」
「ちょっロウ、大丈夫なの？あとで怒られるんじゃ…」
「はい、覚悟の上です。でも王はかなり取り乱しておられて…まともに戦える状態では。」

「そっか。じゃあ、私からもフォロー入れておくね！！」
「…すみません。後先を考えず…助かります。」
ロウは優しく私にほほ笑む。やっぱり素敵な笑顔。
ゆっくり歩いて、もう倉庫の出口付近まで来ていた。

お喋りなんかしないで…
痛いのなんか我慢して…早く倉庫から出れば良かった。
あんな事が起こる前に…

最後

「ねぇ…ロウがさっき出してた黒いの…何？」
私は気になって、ロウに尋ねた。
「…あれが見えたのですか？」
ロウは目を丸くして私を見る。何か変な事言ったかな？
「えっ見えちゃまずいの？」
「…いえ、はじめ様…そうですか…ふふっ楽しみです。」
「…何が？」
「ふふっいっいえ、なんでもありません。」
ロウは幸せそうな笑顔を浮かべる。何かあったのかな？
「なっ何よー！」
もう、意味分かんない。
「私が最初に質問する事ではないので…あぁ、凄く幸せです。」
…意味わかんない。
「もうっ…んで、あれの意味、教えてよ。」
「あっすみません。あの黒い物は、平たく言えば魔力を吸いつくす呪いの様な物です。」
「のっ呪い？」
「はい。思ったより魔力が高かったので、最初から魔力を消させて頂きました。」
「ふーん、そんな事できるんだ。ロウって凄いね！！」
私は素直に感心した。ロウって策士だなぁ。

出口まで後一歩の所まで来て、５メートル程横にルーへのプレゼントが落ちているのを見つけた。
「あっロウ！ちょっと待って？」
私はロウの体から離れ、ヒョコヒョコとプレゼントを取りに行った。
「はっはじめ様！」

ロウが焦って追いかけようとする。こんな近くだもん。大丈夫。
膝を曲げ、プレゼントに手を掛けた瞬間、倉庫の奥から音が聞こえた…

「バンッ！！！」

腹部に熱い熱が走った…
一瞬何が起こったのか分からない…ただ腹部が熱い…
「はっはじめぇぇぇぇぇーーーー！！！」
ロウの凄まじい叫び声が聞こえる。
急いで私に駆け寄るロウ…何焦ってるの？

あれっ？お腹が…冷たくなってきた。
なんか…お腹が濡れてきた…

だっ駄目…お腹は…
お腹だけはやめて…
ここには大事な…

私は意識が遠のくのを感じた…

「バンッ！！！！」

また忌まわしい音が聞こえた。
ロウは私の側まで来て、私に覆い被さった…
おっ重いよ…ロウ。
ロウは私の腹部に顔を埋め、何かブツブツ呟く。
もう、こんな時に何考えてるの？

ロウは深く深呼吸して私のお腹にキスをする…温かいなぁ…

それに…凄く気持ちいい…
ロウは優しくお腹に息を吹きかける…
「ふぅぅぅぅ……ぅっ。」
ロウの全体重が私に掛る。

それと同時刻、凄い早さの足音が聞こえてきた…
その足音の主は私たちの様子を見るなり物凄いオーラを発する…

「……っぅぅっぅおぉぁぁぁぁーーーー！！！！」
声に鳴らない大きな叫び…倉庫全体が大きく揺れる…
「貴様ぁぁぁ！！！楽には死なせぬ！！弄り殺してやるぅぅぅーー！！」

私の意識はそこで途絶える…
薄く開いた目の中に、血まみれのプレゼントが映った…

……朝の木漏れ日が、私の瞼を刺激する。

「……んっ眩しい…。」
私は重い瞼を開ける…体、重いな。
ボーっとした頭で考える。
昨日…なんか急に運動でもしたっけ…全身筋肉痛みたい…
うーんと…確か、学校終わって…ロウと買い物行って…それで……
…あっ！！！
私は体を起こす。

そうだ…マイクが私を誘拐して…ロウが戦って…血が…
そうだ、お腹…お腹は？？
私は急いで自分の下腹部に手を当てる…よっ良かった…何ともない。

私は深く息を吐き安堵する。
お腹から手を離し下へ降ろすと、手にフワっっとした感覚が分かった。
「…ルー？」
ルーはベットに頭を載せグッタリ眠っている様子だった。
「クスッ何こんな所で寝てるんだろう…ふふっ。」
私は頭を伏して眠っているルーの美しい髪を自分の指に絡ませる…

「…っ！はじめっ…」
ルーは急に目を覚まし、私の顔をジッと見つめる。
「…なっ何？どうしたのルー…」
ルーの表情は普通じゃなかった。何をそんなに驚いているの？
ルーは目を丸くして私の顔を見ている。
そして私の両頬に手を当て、そのまま優しくキスをした。
ルー…温かいな…
ルーは口を離した後、もう一度顔を見つめ、優しく自分の胸で私を包んだ…
「…ねぇ、どうしたの？なんか変だよ？」
何時もと様子の違うルー…なにかあったの？
「…はじめ…三日間ずっと寝てた…起きないかと思った…」
ルーの綺麗な瞳から、静かに涙が流れる。
「…うそ…冗談でしょ？」
「…本当だ。」
ルーの尋常じゃな様子を見ると、本当に三日間眠っていたんだろう。
「…私…何が起こったの？マイクが襲ってきて…」
頭をフル回転させて記憶を辿る…
「…思い出さなくていい…思い出すな…」
ルーは私を強く抱きしめる。でも…思い出さないといけない気がするの。

そっそうだ…最後に見たのは…
血に染まったプレゼントの箱…あれは誰の血なの？
「…ねぇ、ロウは？ロウは何処？」
何時も私の側に居たロウの姿が見えなかった…おかしい。
「…ロウは寝ている。」
「へぇ、珍しい。」
ロウが私より後に起きるなんて…今まで一度も無い。
そうだ！ロウに聞けば…あの時の事が思い出せる！！
だってロウが一緒に居たのは覚えてるんだもん。
「私、ちょっとロウに聞いて来る！！」
ベットから体を起こす…重い足が冷たい床に着く。
「…やめろ…」
ルーは私の肩を抱いて制止する。
「…何で？」
「……っ…」
答えないルー…嫌な予感がする…
「いや…退いて！！！」
「はっはじめ！」
私はルーを突き飛ばし、屋敷の外れにあるロウの部屋に走って行った。

「はぁはぁはぁ…」
ロウの部屋のドアノブに手を掛ける。
…なんだろう…怖くて開けられない…手が震えてくる…
私は自分でドアを開ける事が出来なくて…ただ立ち尽くす。

「…はじめ…」
後ろからルーの声が聞こえる。
「…ねぇ…ドアを開けて？…はっあはは！自分でノブが回せないの…」

笑いながら言うんだけど…目から涙が止まらない…どうして？
……多分、ロウも私と同じだと予想していたから。
このドアを開けると…眠ったままのロウが居る気がして…怖かったから…
「…ねぇ…お願い…ルー、ここ開けて？」

ルーは、私の手の上に自分の手を載せ…強く握った。
そして…そのままずっと握っていた…
ねぇ、ルー？手が震えてるよ？

「そこにロウは…居ない。」
静かに話すルー…
「じゃあ…ロウは何処行ったの？」
「……はっはぁ…はぁはぁ…」
ルーは息を乱す…
自分の胸に手を当て、呼吸を整え…私に話しかける。
「ロウに会いたいか？」
「…うんっ会いたい。」
「何を見ても正気で居られるか？」
「……うん…」
正直ロウに悪い事が起こってるのは分かってた…
でも、ロウに会いたかったから。
あの時、私を助けてくれたのはロウだって確信があったから。
お礼も言わなくちゃ。でも…
もしロウが大怪我してたら？正気で居る自信なんてない。でも…
嘘でも付かないと逢わせてくれないでしょ？

ロウは何も言わずに私の手を引く。
「どっ何処行くの？」
「……すぐ分かる。」

ルーの握る手が汗ばんで…凄い力で私の手を握る。
ルーは私を屋敷の外に連れ出した。
「…もしかして…入院でもしてるの？」
「……。」
何も答えないロウ。
ロウは車に乗るでもなく、私の手を引いて…庭の中を進んでいく。
……いっいや…そっちに行きたくない…
「いや…ルー…そっそっちに行きたくない…」
私は手を振り払う…
ルーの進む、その先にある場所を私は知っていた。
ルーは立ち止まり、私の顔を優しく両手で掴む。
「……大丈夫。ルーが一緒だ…。」
ルーは私の肩を抱き、静かに私が歩き出すのを待っている。
「……だめ…やっぱり…」
全身に力が入らない…あっ足が動かない…
「ルー、ごめん。やっぱり私…」
来た道を戻ろうとする…
「はじめ…」
優しく私を呼ぶルーの声…
「ロウが待っている。」
ルーの一言で全てを悟った……
「…うそ……嘘よ…っ。」
私は力なく座り込む。

ルーは私に近づき、優しく私を抱きあげた。
「ロウに会いに行こう。」
「…うんっ。」
小さく頷いた…
私はルーに助けて貰いながら……先に進む…
私はゆっくり…そして確実に足を進める。
そして…薄暗い…その場所で私は足を止める。
ヒッソリと静まり返るその場所…
地面に置かれた無数の石板…
その中に一つの真新しい石板を見つけた。
私は…立ち止まったまま動けなかった…
「はじめ…」
優しくルーが話しかける。
「…うん…。」
私はルーの言葉に背中を押され、真新しい石板の元へ足を進めた。

ロウ・カイン

石板に刻まれたロウの名前…
足がガクガク震え…近くに寄れない…
い…いや…みっ認めない…これは何かの間違い…
「はじめ…ロウの側に…」
私はルーに手を引かれ、石板の元へ足を運ぶ。

そっと石に触れる。
ひんやりと冷たい…

「ロウ…はじめが目を覚ました。」
ルーの声に私は振り返る。
やっぱり…この石の下には…

「ロウ……」
私は地面に向かって声を掛ける。
「ロウ…ロウ…ロウ…」
「……はじめ…」
ルーの声をキッカケに、私の感情が爆発する。

「いっ嫌…嘘でしょ？認めない…こんなの認めない…」
全身が震える…立っていられなくて、その場に座り込んだ。
手に新しく掘り返された土が触れる…
その感覚は妙にリアルだった…
土を手に取り、指で擦る。指の間からサラサラと流れ落ちる…そう、まるで…
ロウの命の様に。

「いや…ヤダヤダヤダ…ヤダヤダヤダ…」
頭を抱え、激しく振る…なにもかも嘘だと思いたかった。
「はじめ！！！」
ルーは私を力強く抱きしめた…
ルーの温もりが私を現実に連れ戻す。

「あっあぁ…あっあっ…いっいや…いやあぁぁぁぁぁーーーーー！！！」

私は力の限り叫んだ…
喉が裂けて…血の味がしても…
心の奥底から…思いっきり叫んだ…
「あああ！！！！うぅあああああああ！！！」
息が苦しくても…喉から血が噴き出しても…やめられなかった…

ルーは私を、ずっと抱きしめていてくれた。
私が他の男を重い、泣き叫んでいても…
ルーは私を離さないでいてくれた…

私の頭の中の…何かが弾けた。
「……あぁ…」
私の中のリミッターが働き…私は意識を失った。
ルーはそんな私を優しく抱きあげ…寝室に連れて行く。

それからの私は…まるで廃人の様だった…
だって…ロウは私の為に死んだ…
私が危機感を持たなかった結果。
私の軽率な行動の結果が…ロウの死を招いた…
あんなに優しくて…
あんなに私を愛してくれたロウ…
私は…ロウに何かしてあげられた？
ううん、何も…
私はただ…ロウから貰ってばかり。
そう、何もかも全部…奪った…

私を後悔が襲う。

私はベットから起きる事が出来なかった…
お腹も空かない…喉も乾かない…ただ眠りたいの。

何もかも忘れて…眠っていたいの。
だって…私がロウを殺したも同然。
ロウ一人なら負けなかった。
私が…殺した…

「うあぁぁぁぁーーーー！！！」
私はベットの上で暴れる。
自分でも抑えられない…
だれか…助けて…

「はじめ！！」
ルーが部屋に飛び込んでくる。
「うぁぁぁーー！！！あああぁぁぁぁーーー！！」
私は叫び続ける…
ルーは私を抱きしめる…
「あぁっあぁ……っはぁはぁはぁ…」
私は少し落ち着き、再び眠りに入る。
そんな私をルーが悲しげに見つめる。

「はじめ…食事だ。」
ルーは寝室に食事を運んでくる。
「……いらない…」
私は素っ気なく答える。
食べたくないの…ごめんね？
「…食べるんだ。」
「…やだ。」
「はじめ…」
「食べたくない！ロウはもう食べられないのに…私だけ食べるなんて出来ない！！」
私は思った事を口にする。

「そんな事…ロウが喜ぶと思うか？」
分かってる。そんな事…。
「ルーの所為よ…ルーが最初から居てくれたら！！！こんな事に…」
こんな事、思っていた訳じゃない。
でも、八つ当たりでもしないと…自分を保てなかったの。
「…はじめ…」
ルーの悲しそうな表情…
ルーだて悔んでるハズなのに…私はなんて非情な言葉を…
「…すまない。」
俯くルー…
「ごっごめん…」
謝って済まないけど…
「いいから。」
ルーは俯いたまま答えた。
「ルーの所為じゃないのに…あれは全部、私の責任。私がロウを…」
「違う！！！」
私の言葉をルーが遮る。
「ロウは自分の意思ではじめを助けた。はじめが拒否してもロウは同じ事をする！！」
「でも…私の行動がロウの命を！！！」
私は泣き崩れる…
「はじめ…」
ルーは泣きじゃくる私を優しく抱きしめる。
「ロウははじめの為に死んだんじゃない。自分の為に死んだんだ。
もし逆に…はじめが死んでいたら…ロウは必ず自害するだろう。」
「…結局…死ぬの？」
「……ルーが悪いんだ。はじめは悪くない。」
私とルーは…きつく抱き合った。

それからも毎日私の看病をするルー。
私が食事を拒否すると、私に縛りをかけて食事をさせ、
私が泣いていると、そっと私を包み込む。

ルーのお陰で、私は少しずつ落ち着きを取り戻した。

そんな時、ルーは何かを持って私に会いに来た。
「はじめ…」
ルーに渡された包み…
「これ…何？」
ルーは答えにくそうに言う。
「…ロウが守った物。」
「…えっ？」
私は急いで包みを開ける。
そこには見覚えのある物が入っていた。
「箱は汚れてしまったが、中身は無事だった。
ロウは…はじめと、これを守る様に倒れていた。」
「…これ…」
真っ白な肌掛け…私からルーへのプレゼント…
私はその肌掛けを抱きしめ…泣いた。

「ロウは、その箱が汚れるのを避けるように…自分の腕に抱いていたんだ…
それは…はじめへのプレゼントかもしれない。貰ってくれ。」
「…ちっ違う…これは…ルーの……」
!!!!!!!
私は、大事な事を忘れてた。
なんでこんな大事な事を忘れてたの？
プレゼントを抱いて、私はあの日ルーにあげたかった、もう一つの存在を思い出す。

私は急いで自分の下腹部に手を当てる…
パジャマをめくり…素肌を撫でる。そこには小さな傷跡。
「ここ…ロウの命が吹き込まれた場所。」
傷跡に優しくキスをするルー。
私はロウの最後の瞬間を思い出す。
「ロウ…ここに息を吹きかけてた…」

ルーは優しく話し出した。
「獣人は大なり小なり、他人の傷を癒す力がある。でも、自分の命を削って助けるんだ。
きっとロウは傷を癒そうと…」
「命…を？だから死んじゃったの？」
「いや…魔力の少ない者なら可能性はあるが…ロウに限ってそれはあり得ない。
ロウなら死人でも生き返らせない限り、自分が死ぬ事は無い。」
「しっ死人？」
「あぁ…でも、はじめの傷は致命傷まで達してない。
だからロウが死んだのは別の理由がある筈だ。」
……私は全てを悟った。

「違う…ロウが死んだのは、やっぱり私の所為だ…」
「はじめ、それは違う！ロウはルーの次に魔力が高かったんだ。
傷の直す位で死ぬ筈は無い！！！」
ルーは私の目を見て、大声で話した。
「違うの！！私の所為なの！！！」
「はじめ…」
ルーは驚いている。
私はルーの話と自分の微かな記憶で、あの時起きた事を話し始めた。
「多分ロウは、私との会話で私の体の事が分かったんだと思う。

それで…私が倒れて…お腹から血が出て…ロウは自分の命と引き換えに助けたの。」
「…だから、はじめを助けた所でロウは…」
「…あのね…ロウは私を助けたんじゃないの。」
「???なっ何を助けたんだ?」
ルーは頭をフル回転させて考え込む…まだ分かんないの?
「あのね…多分このフレーズでロウは気付いたと思うんだけど…言うね。」
「…うん、聞く。」
私は姿勢を正してルーに言った。

「私…ロウが攻撃した時…ロウが黒い何かを飛ばすのが見えたの。」

うん、多分これだと思う。
ロウは黒い何かの話をした直後に嬉しそうにしてたし…

ルーは少し考え…思いついたように目を丸くした。
「はっはじめ…魔力が見えたのか?」
「魔力?あぁ…あれって魔力だったんだ。」
「…はっはじめ…うっうわっ嘘みたいだ…」
ルーは私の下腹部に頬を付け…愛おしそうにキスをした。

赤ちゃん

ロウが自分の命と引き換えに守ったのは…
私とルーの赤ちゃんだろう。
予測だけど…私の赤ちゃん…死んじゃってたんじゃいかな？
傷跡は丁度子宮の上辺り…
傷は子宮を抜け…赤ちゃんの命を奪っていたんだと思う。
それに気付いたロウは…
私とルーの赤ちゃんの為に…自らの命を吹き込んだんだ…

ルーは凄く喜んで飛んだり跳ねたり。
私もそんなルーの様子を見て久しぶりに笑った。
そして二人できつく抱き合った…二人でお腹に手を当て…喜んだ。
正直嬉しかった…愛する人の赤ちゃんは無事にお腹に居る…
でも、それはロウの命を消してしまったという事実。

最初はしゃいでいたルーも、その事実に気付いた様子で…
私たち手を取りあって泣いた…ロウを思いながら…

月日は流れ半年。
季節は初夏を迎えていた。
あれからライオン達は何もしてこなかった。
そればかりか…メイドさん達の話によると…凄まじい罰が下ったみたい。
多分ルーがやったんだけど…怖くて一回も聞いてない。
ただ、ルーから危険は無くなったと聞いただけ。
私たちはロウの話をする事も無くなった。
思い出すと…辛いから。

私のお腹は大きくなり…現在妊娠7カ月。
獣人には専属の医師がいて、私は定期的に診察を受けていた。
「先生…赤ちゃんの様子はどうですか？」
私はモニターに映し出される、赤ちゃんの様子に釘づけだった。
「はい。順調でございます。」
医師はニコリと笑って答える。
お腹に付いたジェルを拭いて貰いながら、私は医師に尋ねた。
「先生？私のお腹って大きすぎませんか？」
まるで臨月の様に大きなお腹…7カ月ってもう少し小さい様な…
「いいえっ標準だと思います。」
「そっそうですか…」
医者がそう言うなら…でも本当に大きなお腹…もしかして…双子？

「先生…もしかして双子ですか？」
双子を妊娠すると通常より大きくなるって聞いた事があった様な…
「いえ？お腹に居られるのはお一人です。」
医師ははっきり断言する。
「そうですか…7カ月ってもう少し出てない様な気がしたので…」
従兄が赤ちゃんを産んだ時、私は何回かお腹を触らせてもらって…
従兄の臨月の時と今の私のお腹の大きさ…似てる。
私がその話をすると、医師は思ってもみない事を話し出した。
「王妃様・・・それは人間同士の結合の場合です。
王妃様の赤ちゃんは、獣の長…王の子供です。
普通猫族の妊娠期間は６０日前後とされています。なので…王妃様と王とのお子様は…」
「妊娠期間が違うの？」
「はいっ大体8カ月で出産になります。」
「はっ8カ月？？」
って事は…私既に臨月ですか？

「もしかして…もう生まれますか？」
「…？はいっ。多分あと1～2週間以内に。」
「うっうっそーー！！」
十月十日お腹に居ると思い込んでた私はビックリ！
赤ちゃんの物…何も買ってない！！やだぁ！！
私は診察を終えると、お昼寝中のルーを無理やり起こし買い物に出かける。

ルーは私の外出に必ず付いてきた。
あの日、ロウに不意を突かれ遅れてやってきたルー。
その事がルーを苦しめ、私の外出はルーの監視が無いと出来なくなっていた。
まぁ…デートみたいだから嬉しいんだけど…

私はルーの腕に巻き付きながら町を歩いた。
今日のルーはカジュアルな格好をしている所為かモデルさんみたい。
って…嫌がるルーに無理やり着せたんだけどね。

大きな百貨店…赤ちゃん用品が充実だと聞いてやって来た。
私はルーそっちのけで物色。
可愛い！！小さい！！全部欲しい！！
私はウキウキしながら手当たり次第に籠に商品を入れる。
多分…お金出したら相当な金額だけど…ココは獣人が経営する店。
すなわち…
ぜーーぇんぶタダ！！
夢みたい！！
だって、皆一度は思うでしょ？デパートの商品を好きなだけ貰えたらって…
ちょっと気が咎めるけどね！

私は欲しい商品を選び終わるとルーに話しかけた。
「ねぇ！これ見て…って、居ない。」
後ろにいた筈のルーが居ない。
ルーを探しに店を歩きまわる…どっ何処に行ったの？

エスカレーターの前、人だかりが出来てる。何だろう…
私は後ろからつま先立ちで覗く…
エスカレーターの横に置かれた簡素なベンチ。
そこで足を組み目を瞑る男…
長く、光り輝く髪…整い過ぎる美しい顔…私の愛する人…
ルーはベンチで転寝をしていた。
硬そうなベンチで眠るルー…人形の様な美しい姿…
そりゃ皆見るよ。
「あの人…素敵ねー！」
「なになに？あの人ってモデル？芸能人？」
ヒソヒソ話が聞こえる。
「声かけなよー！」
「えーっ相手にされないよ…」
「大丈夫だよ！！ほら！！」
私の横に立っている美人の二人連れ。ルーを逆ナンしたいらしい。
「ちょっ…」
私が声を掛けると同時に二人は動きだした。
「あのーーっ何やってるんですか？」
一人の女が話しかける。
「……。」
ルーは完全にシカト。ふっふん！ザマー見ろ！！
でも諦めない二人は、自らの胸を強調してルーを覗きこむ。
「あのー、もし時間あったらお茶でもしませんか？」
もう乳首見えるんじゃないかしら…っと思う程の露出っぷり。
ルーは目を覚まし、二人の女を見る。

「うわー！すごくカッコイイ！！」
「起きても凄い素敵…」
「あの女…悔しいけど美人だし…ほらＣＭとか出てる人じゃない？」
周りの女性達がざわめく…
「あのーっこれからぁー。」
更に胸を強調して話しかける女…もう、やめてよーーー！！
「……臭い。」
ルーは低い声で言う。
「へっ」
聞き取れない女。
「…臭いからどっか行け…」
「うっ！！！！信じらんない！！この変態！！」
女は自分が臭いと言われ、怒ってどっかに行ってしまった…
香水…付けてたんだね。

ルーは自分の周りが人で一杯なのが気に食わないらしく、ムスッとしている。
でも…いきなりルーの表情が変わった。
「はじめ！！」
ルーは大きく私の名前を呼び、人をかき分け私も元に来る。
私の首筋に自分の鼻を擦りつけ、思いっきり私の匂いを吸い込む。
「なんかさぁ…臭いんだ。早く帰ろう？」
ルーは甘える声で私に言う。
「ちょっルー！離して…」
ルーは私を離そうとしなくて…
「いいなぁ…」
「羨ましい…」
「ブスの癖に…」
周りの女性達から妬みの声が聞こえる。
なんか、居心地悪い…

「はじめ…早く帰りたい。」
「…うん、帰ろうか？」
私はルーに商品を持ってもらって帰宅した。

帰って来てから、私は赤ちゃんの物をベットの上に広げた。
下着、洋服…色々ね。
全部可愛くて…何時までも眺めていたい…
うっとり眺めていると、ルーは全身裸で部屋に来た。
「はっはじめー…」
甘えた声を出すルー。
「どうしたの？」
「…まだ鼻に付いた匂いが取れない…」
ルーは鼻を頬りに擦りながら半べそをかいている。
「…ふふっお風呂でも入ってきたら？」
「…風呂位では落ちない。」
ルーは私に近づき、そっと押し倒した。
「ちょっルー？」
私とルーはあの日から体を繋げていなかった。
久しぶりに押し倒され…ちょっと興奮しちゃう。
「あっ赤ちゃん居るから…」
私は赤ちゃんが心配で…拒否してみた。でも…
「深く入れないから…医者も思いっきりしなければ大丈夫だと言っていた。」
「あっそんな事聞いたの？」
「うん、聞いた。ルーの…破裂しそうなんだ…」
猫って自分でしないのかしら…
あまりにしつこくお願いされて…私はＯＫの意味も含め、ルーの口にキスをした。
「はっはじめーーーぇ！」
ルーは私の名前を叫んで…熱いキスをする。

ルーは医者の言う事を守り、そっと優しく私を愛した。
長い事してなかったから、ルーはいつも以上に興奮しちゃって…
ルーは決してお腹に負担を掛けなかった。

「はっはじめぇーぇ…ルー…ルーはもう…」
なっなんて声出してるの？もう、超可愛いぃぃ！！
目なんかトロンとしちゃって…なんて可愛い旦那様！！！
ルーは可愛く果てた。

「産まれたら…沢山しようね。」
私は震えるルーの頬に軽くチュッっとキスをした。

それから一週間、私は忙しく動き回り、赤ちゃんを迎える準備を整えた。
小さなベット…小さな下着、どれも小さくて可愛い。
それは幸せな時間だった。

「はじめー！」
ルーが走ってくる。
私は庭でお昼寝をしていたんだけど…気持ち良かったのに起こされた。
「なっ何？」
「こっこれ見ろ！」
そう言ってルーは一枚の写真を手渡した…
そこには一匹の猫が映っていた。
「これ…猫？」
全身が黒い猫。短めの毛が光っている。
猫にしては優しい眼差しでカメラを見ている。
「これ…誰だと思う？」

「……もしかして…ロウ？」
すぐ分かった。
長くたなびく尻尾。整った毛並み、長い髭…美しく気高い。
「見たかったな…」
ちょっとしんみり。
「一枚だけあったんだ。ロウの写真。」
ルーは愛しそうに見つめた。
そうだよね…ルーにとっては最後の肉親だもんね…
ルーだって寂しかったよね…
でも私が落ち込んで…ルー、辛いのに頑張って看病してくれたんだね…

少し肌寒くなって部屋に戻ろうと立ち上がった瞬間、股の間から温かい液体が流れた…
「えっな…に、これ…」
「！！！」
ルーの顔色が曇る。
ルーは私を抱え、寝室にそっと寝かせてくれた。
「すっすぐ医者を呼ぶ！！」
ルーは毛を逆立てながら走って行った。
もう、大丈夫なのに…
これは多分、破水したんだと思う。
もうすぐ赤ちゃんが生まれるって印。
医者から聞いていたから、私は比較的落ち着いていた。

「はじめーー！！」
ルーはゼエゼエ言いながら戻ってきた。ルーの片手に医者の白衣が見える。
「ルー…お医者さんは？」
「医者はここ…あれ？」

ルーは握っている白衣の中身が居ない事に気付く。
「ちょっちょっと待ってろ！！」
ルーは慌てて医者を探しに行った…何処に落としてきたの？
ルーがちゃんと医者を連れてきた頃、私のお腹が痛み出していた…
「うぅーっうぅーっいっ痛いっ。」
悶える私。
だって…凄く痛いんだもん。
「はじめ、大丈夫か？」
ルーは私の腰を優しく擦る。
「……っぷはっはぁはぁはぁ…うん、少し落ち着いた…」
ルーは私の側をウロウロ…落ち着きなく歩き回る。
「もう、少し落ち着い…って！痛ーい！！くぅ…ふうっうぅ…」
また陣痛の波が襲う。
陣痛の痛さに耐える時間は、何倍にも感じる。

陣痛が来るたび、ルーの方が苦しそうに息を止めていた。
なんか、ルーが産んでるみたい。
「くぅ…いっ痛っあぁっ！！」
何度も襲う陣痛の波…もう…死にたくなる。
この世の物とは思えない痛さ…下腹部が、かき回される感じがする。
そんな時間を、私は半日以上耐えていた。

「うーん、なかなか開かないですね…」
医者が私の股の間で喋る。
「陣痛の間隔はもう一分切ってるんですけど…おかしいな…」
医者は頭を捻る。
「先生！！心音下がってます！」
看護師が慌てて声を張り上げる。
ルーは看護師の様子から、只ならぬ事を感じ取り、私の手を強く握

る。
お腹に付けたモニターが異常音を出す。
「……帝王切開で出しましょう…」
医者が決断を下す。
おっお腹切るの？うそぉ！
でも、もう陣痛に耐えられない…死ぬほど苦しい…
私は激しい陣痛で、なんだか意識が遠のく…

「！！先生！王妃の様子が！！」
自分でもヤバイって分かってたけど、遠のく意識は止められない。
自分が深い闇に落ちていく感じがした。
「はじめ！はじめ！しっかり！しっ…か…り…ぃ…」
遠のくルーの叫び声。
ごめん、ルー残して死んじゃうかも…

暗い闇の中、私は一筋の輝く光を見つけた。
あったかい…やさしい光…
私はその光の元へ飛んでいく…
は…じめ…はじめ…はじめ…
私を呼ぶ声…誰？
はじめ…はじめ…
……ロウ？ねぇ、ロウでしょ？
光は優しく私を包む。
そして、光はロウのシルエットに変わる。
ロウ…私を迎えに来たの？
ごめんね…せっかく守ってくれた命…もう、駄目になっちゃう…

ロウは私にキスをした…優しく、口を重ねる。
温かい…
ロウは私のお腹にもキス…

ロウの口が触れる所から、温かい何かが全身に広がる。
ロウ…あったかい。

ロウは私から離れ…何処かに飛んで行こうとしてる…
まっ待って！置いて行かないで！！
ロウは静かに微笑んで…消えた。
嫌！また私の前から居なくなるなんて！！嫌！

私は目を覚ます。
ピッピッっという機械の音が耳に入ってくる。
うっすら目を開けると、涙でグショグショのルーの顔。
王の威厳なんか、まったく感じない。
「ルー…。」
声を掛ける。
ルーは黙って、私の手を握る。
「あのね…ロウに会った。」
「グスっグスっ…ロッロウに？」
「うん、お腹にキスして…居なくなった…」
「…そうか…」
「うん、夢でも見たんだと思う。」
「……はじめ、夢じゃないよ…。」
「…へっ？」
「はじめが意識を無くした途端、赤ちゃんの心音が落ち着いたんだ。」
「……そっか…ロウが…ッ痛！！痛い！！」
再び始まる陣痛…もう限界…
それに、なんか違う感覚が…おっお腹に力が…勝手に…
「失礼します。」
医者は私の膣の中に指を入れて内診する。

「…おぉ、嘘みたいだ…王妃、急に全開になりました。王妃様！いきんでください！！」
私は医者が陣痛に合わせて、思いっきり力を込める。
「うううううううっぷはっはぁはぁはぁ…」
また陣痛を待って力む。
「くぅぅぅぅ…いっ痛っ」
ルーも一緒になって力入れるから、白い肌が真っ赤になってる。
「はい、次で出ますよ！最後です。はい！いきんで！！！」
医者は指示を出す。
「くうううううっっっっっ。」
思いっきり力を入れた。
「…っはいっ！王妃、力抜いて下さい。頭が見えました。」
私は何かが股に挟まっているのが分かった…
「今から出ますよ！はいっ両手も出まし…た…。」
医者が言葉を飲み込む。
「ギャーギャーギャーォギャー！！」
大きな声で赤ちゃんが泣く…私とルーの愛の証…
「先生？」
赤ちゃんの処置を黙って行う医者…普通おめでとうとか、性別とか…なんで黙ってるの？
もしかして…赤ちゃん、危ないの？
赤ちゃんの処置を黙って見守るルー…
「ねぇ、ルー…赤ちゃん無事？」
私の問いに、ルーは笑って頷いた。

「王妃様、男の赤ちゃんでございます。」
白いおくるみで巻かれた赤ちゃん…今は落ち着いて眠ってる。
私は小さなわが子を胸に抱いた。
温かい…小さい…
なんて可愛いんだろう…

ルーに赤ちゃんを見せる。
ルーは赤ちゃんを大事そうに受け取って…クンクン臭いを嗅ぎ始めた。
「ルッルー？」
ビックリして声も出ない。
ルーは赤ちゃんの匂いをスーっと吸いこむと、急に顔をニヤーっとだらしなくする。
「はじめ…可愛いなぁ…」
もうウットリした顔で赤ちゃんを離さない。
「ぷっルーってば…ほらっ！赤ちゃん返して！！お乳あげないと！！」
私は赤ちゃんをルーから取り上げる。ルーは不満そう。
「…早く抱かせろ。」
「ちょっ今まで抱いてたでしょ？もうっふふっ。」
ルーの様子が嬉しかった。こんなに喜ぶなんて…
私は赤ちゃんを太ももに起き、自分のおっぱいを出す。
赤ちゃんを再び抱いて自分の乳房に…その時、信じられない物が視界に入る。

「なっなんで…」
はだけた赤ちゃんのお包みから飛び出した物は…尻尾だった。
獣人の赤ちゃんだし、不思議では無いんだけど…
その尻尾は黒く輝いていた…
「えっ何で…」
顔が青ざめる。その尻尾はどう見てもルーに似ていない。
むしろ…ロウにそっくりだった。
まるで、ロウと私の赤ちゃんみたい。
でっでも…私とロウは挿入まで…してないよね？
「ルッルー…なっなんで…尻尾…黒…」
だから皆黙ってたんだ…漸く理解した。

「ねぇ、この子はルーの子供だよ？わっ私、ルーとしか…信じて！！！」
ルーの手を握って話す。お願い…信じて…
「分かっておる。」
ルーは優しい声で言う。
「この子は、ちゃんとルーの子供だ。」
「…うん、ルーしか私…」
私は優しいルーの言葉が…涙が出てくる。
「はじめ…ちゃんとルーの遺伝子を受け継いでるよ。ほら…」
ルーは赤ちゃんを抱いて、私の鼻に近づける。
「嗅いでみろ。」
？？嗅いでも良い匂いしか分かんない。
「…そうか、獣人じゃないと分からないか。
はじめ、獣人は自分の子供の匂いは分かるんだ。」
「…うそ。そんな事分かるの？」
「あぁ…。分かる。この子からは、ちゃんとルーの匂いがする。」
…私には全然分からない。
「はじめ…ちゃんと尻尾を見て御覧。」
ルーは赤ちゃんの尻尾をクルッっと裏にする。……あっ！！
真黒な尻尾。でも裏側は真っ白だった。
「なっ？この子はちゃんとルーと、はじめの子供だ。」
「…ふふっホントだ。」
私は赤ちゃんをルーから受け取り、初乳を飲ませる。
コクコクっ音が聞こえる。
あぁ…私の可愛い赤ちゃん…
私は赤ちゃんの顔を見て…母の喜びを噛み締めた。

最終話

私とルーの赤ちゃん…なんで尻尾が二色なんだろう。
今までの王族の歴史でも例がないらしい。
ルーが言うには、赤ちゃんが一度死んでしまった時、ロウが命を託したからじゃなかって。
私もそう思う。
この赤ちゃんには、二人のお父さんが居ると思ってる。
何時も側に居て守ってくれる強き父親、ルーシャ。
自分の命を分け与えた優しき父親、ロウ。
きっとこの子は二人の父親の愛と命を貰って、幸せに生きていく筈。

「ロキ！何処行ったのぉー！！」
私は朝から騒がしく屋敷を走る。
もー！何処に隠れたの？

私たちはロウから一文字貰って赤ちゃんをロキと名前を付けた。
ロキは順調に大きくなっていた。
黒と白の綺麗な髪がチャームポイント。
親ばかじゃないけど、私たちの子供は美しい顔の作りをしてる。
まぁ、ルーの遺伝子受け継いでるんだから当然なんだけど。
そして…ロキの下腹部には産まれる前から大きな傷があった。
傷は多分、ロウが命を掛けて守ってくれた証なんだと思う。

そして私は今、朝からワンパク盛りで逃亡中のロキを探している途中。
私とルーの大事な子供ロキは今、生後半年になった。

人間と比べると驚異的なスピードで成長するロキ。
私は毎日ロキの世話でヘトヘト！
もう…誰か手伝って！

ロキを見つけたのはそれから5分後。結構早く見つけたでしょ？
それには秘密があるの。
ロキは大抵同じ所に隠れてるの。そこは…ロウの部屋。
ロウの部屋の大きなクローゼットの中が定番の隠れ場所。

「ロキ！！もうご飯の時間だよ！！早く行こ？」
「あーぁ、また見つかっちゃた。」
渋々出てくるロキ。
私はロキの手を離さない様に食堂へ向かう。

「早く席に着きなさい。」
父親全開のルー。
「はぁーいお父様。」
嫌嫌席に着くロキ。
私の一日はそうやって始まる。

食事が終り早くも逃亡したくてワクワクするロキ。
「ロキ！今日は先生来るんだから、ちゃんと部屋に居てよ？」
「えーーーっやだなぁ…。」
ロキは定期的に家庭教師の先生に勉強を教えてもらっている。
ロキはその日が大嫌い！
ロキが不機嫌な顔で嫌がっていると、ルーパパのキツイ一言がロキに襲いかかる。
「馬鹿は嫌いだ。」

ロキはルーが大好き！

将来の夢は王様！
憧れの人はルーシャ・カイン！
筋金入りのルーシャファン。自分の父親なのにね。
それで渋々勉強を受け入れている。
でもね、やっぱりルーの子供で、教えた事は一回で覚える。
外国語はペラペラで、もはや私の手には負えない。
私は高校を中退しちゃったし…ロキには色々学んでほしいと願って…
色々な教科の先生がロキに教えてる。

今日は外国語の先生が来る予定。
私は授業中、先生にお茶を出そうと、ロキの部屋を訪ねた。
コンコンコン…
「ロキ、勉強してるー？」
「あっ王妃様…」
外国語の先生は若い男性。
「あっあれ？ロキはトイレ？」
室内にロキの姿が無い。トイレはロキがサボる口実。
今もそうだと思って先生に尋ねる。
「……いっいえ…その…あの…」
…先生の様子がおかしい…
私は只ならぬ様子の先生を見て、急いでルーを呼びに行く。

仕事中のルーの腕を引っ張って、ロキの部屋に走る。
「あっあがっあぁぁ…」
先生は口から泡を吹いて痙攣していた。
「きゃぁぁぁ！！」
私は白目を剥く先生の様子をみて悲鳴を上げる。
ルーは先生を抱え、床に寝かせる。先生の額に手を当て…何か呟く。
先生の体が一瞬大きく跳ね、次第に痙攣も収まる。

「あぁ…ぷはぁ！！はぁはぁはぁ…すっすみませんで…ゲホゲホっ。」
先生は何とか意識を取り戻した。
「せっ先生、何があったの！ロキは！」
私は捲し立てる様に先生に質問する。
「はぁはぁ…ロッロキ様は…知らない男が…」
「！！！！っ」
ルーの表情が怒りに変わる。
「しっ知らない男？」
「はっはい…僕が床に落ちたペンを拾おうとして目線を離した瞬間に…」
「チッ。」
ルーは足取り激しく部屋を出ていく。

私はルーの後を追う。
ルーは世界中と通信できるモニターの前で何やら機械を弄ってる。
どうやらロキの行方を捜しているみたい。
「！！！分かった。」
ルーは私に嬉しそうに報告する。
「はじめ…ロキ見つかったぞ！」
私は急に緊張の糸が切れて、その場に座り込む。
「はやっどうしてすぐ見つかったの？」
「ロキのピアス、発信機になってる。」
あっさりと種明かし。
取り合えず、私はロキのピアスの電波を頼りに探しに行く。

電波が示した場所にロキの姿は無かった。
代わりにあったのは…大きな血の塊…そしてピアス。
「いっいや…嫌ぁぁぁぁぁ！！！」
私はその場で気を失った。

ロキ…ロキ…何処に行ったの…無事なの？
お願い…誰かお願い…ロキを守って…子供を助けて…

私たちは手掛かりを無くし、一旦家に戻った。
ルーは庭に立ち尽くし、空をジーっと見ていた。
多分、ロキの気配を探してるんだと思う。
私は何も出来なくてオロオロするだけ…
ルーの隣に居ても役に立たないし…
私は久しぶりにロウの墓に足を向けた。

「ロウ…お願い…居場所を教えて…」
私はロウの墓石に抱きつき、ロウに話しかけていた。
「ロウ…ロキが…居なくなっちゃった…何処に居るか知らない？」
返ってくる筈の無い返事を待つ…

「はじ…め…はじめ！！」
遠くからルーの声が聞こえた。もしかして見つかった？
私は立ち上がり、声のする方へ走って行こうとした。
でも…背中に視線を感じ、私は一度振り返った。
気のせいだと思うけど、ロウの気配を感じたから…

ルーは全神経を集中させ、ロキの気配を探し出していた。
私はルーと一緒にその場所へ迎えに行く。

向かった場所にロキは居た。
その姿に私は絶叫した…
「きゃぁぁぁ！！ロッロキィ！！」
急いで駆け寄る。
ロキは子猫の姿になっていて、全身血まみれ状態…
そして、一人の少女の胸に抱かれていた。微かに胸は上下している

けど…
「ロキ！！」
ルーが急いでロキを取り上げる…そして、ロキの口にフゥっと息を吹きかける。
「あっあの…」
少女が怯えた表情で私たちを見つめている。その時、
「ミッ…」
ロキは小さな声で泣いた。
私は腰が抜ける。
「良かった…」
大粒の涙が流れる…生きてる…本当に良かった…

「あっあの…猫ちゃんのお父さんお母さん？」
少女のか細い声が聞こえる。
「んっ何？」
「猫ちゃん…大丈夫？あっあのね…カラスが猫ちゃん虐めてたの…」
どうやらカラスに囲まれている所を少女が見つけ助けたらしい…
「あっ貴方が助けてくれたの？」
「うんっだってカラスが酷いんだもん！！」
少女は興奮して話をする。良く見ると少女にも無数の傷があった。
「あなた…怪我したの？」
少女は自分の体を見て…泣きだした。どうやら今気付いたらしい。
「ニッニッニャー！！」
意識を取り戻したロキが騒ぎ出した！なんか…怒ってる！
ロキはいきなり人間に変身を始めた。少女はそれを見て口をポカーっと開けている。
『マズイ！！』思わず二人でハモった。
私はロキを、持っていた白い肌掛けに包み急いで走り出す。
「ルー！後宜しく！！」
一言声を掛け、その場を後にする。

ルーは固まっている少女に近づき、傷を簡単に直し、少女の記憶を消した。

元々治癒力がずば抜けているロキは一日寝ているだけですっかり元気。
ルーの応急処置も凄かったんだけど。
結局ロキを誘拐したのはカラス一族で、理由は私の時と一緒。
王族って気が休まる時が無いって言うか…

でも、これからも私たちは大丈夫。
だって、ルーが守ってくれるから。
何があってもルーを信じて付いていく。

最初は酷い出会いだったけど、それすら今は懐かしい。
私はルーに出会えて幸せだ。
心の底からそう思う。

終り

第一部

最終話（後書き）

最後まで読んで下さった方、ありがとうございました。
また、無理やり編集した為、文章がおかしい所あったかも知れません…
もし不愉快な文があったとしたらすみません。

本編は第二部に入ってます。
よかったら読んで下さい！　ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3704n/

動物の王妃

2010年10月9日10時15分発行